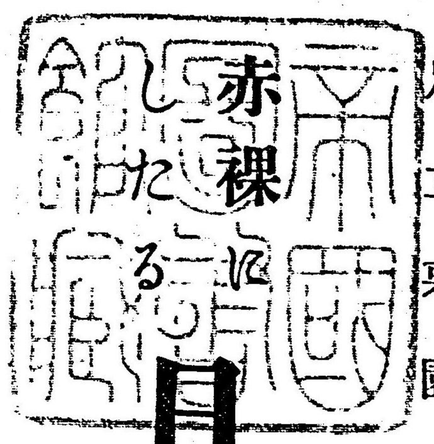
足立栗園著

赤倶にたる日蓮大士

東京 警醒社書店

97-342



赤裸なる

日蓮大士

足立栗園著

東京

警醒社書店

明治
39 4 5
交内

はしがき

紫野一休の歌に曰く

釋迦と云ふ、いたづら者が世に出て、
多くの人を迷はするかな

釋していふ、此歌釋迦を指して、いたづら者といへるにあらず、これも釋迦の金句、予こそ彌勒の再來なれといふ、いたづら者が、世に續出する故に、多くの人を迷はするなりと。

近時、日蓮大士を論評せる書の出づること多しと雖も、何にも我國宗教の發達史に暗きが故に、社會に於ける日蓮の眞面目を發揮して餘蘊なきもの少し、これ本書の出づる所以なり

と、大袈裟には出たものゝ、居士とても固より淺學菲才、矢張一休にいたづら者と笑はるゝ列ならんかも

明治三十九年二月　栗園居士記

例言

日蓮大士

一本書は日蓮大士を批評すといふよりも、寧ろ其特色眞價を發揮せんと欲して、世に公にしたるものなり。

一本書は一夕客と日蓮大士を談論せるを基礎とし、博く諸書に徵して其根據を確め、可成、日蓮其人の面目を描出せんことを勉めたるものなり、客見て曰く、これ日蓮大士を赤裸とせるものにあらずやと、乃ち取て題號とす。

一坊間、日蓮大士に關する著書多く、何れも名論卓說ならざるなしと雖も、然も多くは日蓮當時の社會を顧みず、特に我が政敎相關史を深く究めざるが故に、偉人としての日蓮の特色を窺ふ能はざるに似たり、これ著者の自ら揣らずして、此篇を公にせる所以な

はしがき

紫野一休の歌に曰く

釋迦と云ふ、いたづら者が世に出て、
多くの人を迷はするかな

釋していふ、此歌釋迦を指して、いたづら者といへるにあらず、これも釋迦の金句、予こそ釋迦の再來なれといふ、いたづら者が、世に續出する故に、多くの人を迷はするなりと、

近時、日蓮大士を論評せる書の出づること多しと雖も、何れも我國宗教の發達史に暗きが故に、社會に於ける日蓮の眞面目を發揮して餘蘊なきもの少し、これ本書の出づる所以なり

と、大袈裟には出たものゝ、居士とても固より淺學菲才、矢張一休にいたづら者と笑はるゝ列ならんかも

明治三十九年二月

栗園居士記

例言

一本書は日蓮大士を批評すといふよりも、寧ろ其特色眞價を發揮せんと欲して、世に公にしたるものなり。

一本書は一夕客と日蓮大士を談論せるを基礎とし、博く諸書に徵して其根據を確め、可成、日蓮其人の面目を描出せんことを勉めたるものなり、客見て曰く、これ日蓮大士を赤裸とせるものにあらずやと、乃ち取て題號とす。

一坊間、日蓮大士に關する著書多く、何れも名論卓說ならざるなしと雖も、然も多くは日蓮當時の社會を顧みず、特に我が政敎相關史を深く究めざるが故に、偉人としての日蓮の特色を窺ふ能はざるに似たり、これ著者の自ら揣らずして、此篇を公にせる所以な

り。

一文章通俗を旨とし、談話体に綴りしを以て、言辞覺えず奇矯に失し、非禮に流るゝ所少からず、大方の宥恕を乞ふ所なり。

明治三十九年二月

著者識

赤裸にしたる

日蓮大士

目次

(一) 日蓮はドコがエライ……一
(二) 日蓮は野心家か……五
(三) 日蓮は信念ありや……九
(四) 上行菩薩の再來……一二
(五) 十界大曼陀羅……一四
(六) 四個格言……一七
(七) 立正安國論……二二
(八) 豫言の根據……二六
(九) 國宗的觀念……三二

日蓮大士

(十) 樂天主義……三八
(十一) 諸佛本懷論……四二
(十二) 法華眞實論……四九
(十三) 法華題目說……五五
(十四) 女人成佛說……五七
(十五) 攝受門……六三
(十六) 日蓮の傳記……六七
(十七) 日蓮の素性……七四
(十八) 龍ノ口法難……八〇
(十九) 身延の退隱……八五
(二十) 日蓮の人格……九〇
(廿一) 日蓮の感化……九四

日蓮大士

(廿二) 日蓮は偉人なり……九六
(廿三) 日蓮大菩薩……一〇〇
(廿四) 日蓮宗の發達……一〇四
(廿五) 法華念佛の宗論……一一〇
(廿六) 日蓮宗の迫害……一一五
(廿七) 信仰と形式……一二一

赤裸にしたる日蓮大士

栗園居士述

(一)日蓮はどこがエライ

客あり來り問ふて曰く、一体、日蓮はどこがエライのですかと、答へて曰く、どうも君の突飛の問にはオイソレと答へ兼ねるが、然し何人も日蓮を知らんと欲する所は、ツマリ其エライ點にあらうから先づ素人考を言つて見やう。

總て世の中に大事蹟を遺し永く其大事業を傳へんには、最初事に著手する以前先づ社會の趨勢を達觀する必要がある、社會の大勢を知らずして無暗に飛び出し空拳を振り上げた所で、ソレは盲滅法界に

アチラの角、コチラの端に中り散らかすのみで、物の急所といふものを衝くことが出來ない、即ち活眼を開いて、大勢の趨く所をヅーッと見究め、それから周密に思慮を廻らして、自分の立場といふものを明かにし、其基礎を鞏固にすると同時に、外に向つての活動の眼目といふものを定めて、手を替へ品を換へて、一圖に其眼目を穿貫するといふことを所期せねばならぬ、此外部に向つての活動の眼目と、内部に處する立脚の根據といふものが正確で且つ鞏固でないならば、たとひ一時は幸運に乘ずることは出來ても、行々失敗に終らねばならぬ、遠くは鎌倉三代の覇業が先づ其失敗の鑑で、江戸十五代の覇業が僅に成功の鑑といつてよい、近くは日本海大會戰の成功が此内外の處置をうまくやつたからで、露國が旨滅法に東方に手を伸して、世界の趨勢にお構ひなく、まづドッシリ軍艦さへ送れば、

どうにかなるだらう位の考で事を處したのが、即ち今回失敗の大原因である。

所が兎角、此内外呼應して事に當るといふことがむづかしいものと見へて、例へば何々會などいふ事業にしても、此兩方の揃ふて發達して居るものは少い、内部が鞏固で兎に角基礎がゆるがぬといふ方は外部に向つての活動が緩漫で、之に反して外部に向ての活動に半ば成功せんとして居る方は内部の基礎がどうも薄弱たるを免れない、それゆへに一方は何時まで經つても社會に於ける大勢力といふものを占め得ることが出來なくて、一方は多少成功せんとしても、やがて内部の破綻の爲に、世の信用を失ふて早晩失敗を招かぬものはない、此兩方を成功するものが即ち世に非凡と名付けられるのであつて、内外相應じて成功を告げしめるものが、即ち英雄に相違ない、

日蓮はどこがエライ

然し英雄は必ずしも事々に自ら手を下すのではない、内外の活躍を成し得るやうに、其麾下に人物を網羅することが出來るので、其處が即ち凡俗に一頭地を抽いて居る要點である。

日蓮　大士

日蓮は實に此成功の秘訣を悟了して居つたものだ、即ち一方に折伏の劒を揮ふと同時に、一方には攝受の門を固めて居る、即ち己が一生の間殆ど折伏一方で、政治宗教の兩方面に暴れ廻り、同時に若々として攝受門の基礎を固め、其宗乘を永く後世に榮へしめたのも面白い、之は最初より内部の鞏固と外部の活動とを使ひ分けて、社會をして其手品の巧妙なるに啞然たらしめたものに相違ない。

要するに素人として先づ日蓮の事業を大觀するならば、彼は人間成功の大秘訣を胸に疊んで仕事に取掛つたのが、第一に彼のエライ所とするがよい、然し之は未だ日蓮其人の人物性格に就いて評論したのではない。

日蓮　大士

（二）日蓮は野心家か

問、ソンなら日蓮は野心家であるか。

答、然り大の野心家也、野心家とは世人は直に之を卑しい心のものやうに思ふが決して左樣ではない、すべて如何の事業にても野心滿々、羈氣縱横でなければ決して成功しない、然し其野心を凡眼から直に野心と認められ、其覇氣を世人から直に畏忌せらるゝやうでは、大事業も出來ぬし、又大人物でもない。

一体、狂熱とか野心とかいふ語は、文字に語弊があるが、之は表現の仕方がないから此種の文字を用ゆるので、必ずしも野といふ文字を卑しいと見るに當らぬ「野に叫ぶ聲あり」と呼はつて成功した耶

日蓮は野心家か

鮮も、北米合衆國を獨立せしめたワシントンの功業も、矢張り野心に相違ない、唯だ誠意の欠乏した野心のみは、忽ち挫折失敗するので、天眞爛熳の野心は必ず美花を開き果實を結んで成功するに極つて居る、野に咲ける百合の花の如何に愛らしく無邪氣なるかを看よ、日蓮の一天四海皆歸妙法の叫は實に彼の野心の榜標である。

然らば日蓮の所謂天眞爛熳の野心は、どこにあるかといふに、ソレは引括めていへば、彼が我國を本位として一圖に之を愛するといふ所より、表面に諸宗無得道を叫び、外寇來を呼はり國內の上下を擧げて政治家をも宗教家をも警醒せしめ、而して裏面にては法華眞實の基礎を作つて永く此宗旨によつて、國家的觀念を國民信仰の上に結び付けしめんと目論だ點にあるのである、それゆへに日蓮は折伏の方便として、外寇の來るのも、邪宗を信ずる故ぞと叫び、又梵

天帝釋が殊更に邪法を罰するために、蒙古をして我國を懲らしめたまふのであるといつて居る、而して本化上行菩薩の再來たる日蓮自身の此救世の叫があるために、幸に日本は亡國を免かれて、蒙古來の後には、國の悅を來すとまで公言して居るのである、これは實に天眞爛熳の野心ではないか。

是れ梵天帝釋日月四天の彼の蒙古國の大王の身に入らせ給ふて、責めたまふ也、日蓮は愚なれども、釋迦佛の御使、法華經の行者なりと名乘り候を用ひざらむだにも不思議なるべし、其答によつて國破れなむ。

後生は扨置きぬ、今生に法華經の敵となりし人をば梵天帝釋日月四天罰したまひて、皆人に見懲らさせ給へと申付けて候、日蓮、法華宗の行者にある無しはこれにて御覽あるべし、斯う申せば、

日蓮は野心家か

國主等は此法師の威どすと思へる歟、敢て惡みては申さず、大慈大悲の力、無間地獄の大苦を今生に消さしめんと也。

國破れなんといへども、國亡びなんとは言はず、無間地獄の大苦を今生に消さしめんためといつて居る眼目を知らねばならぬ。

蒙古國の事既に近づいて候歟、我國の亡びんことは淺ましけれども、是だに虛事になるならば、日本國の人々愈々法華經を謗りて萬人無間地獄に墮つべし、彼（蒙古）だにも强かるならば、國は亡ぶとも謗法は少くなりなん、譬へば灸治をして病を癒すが如く、鍼治にて人をなほすが如し、當時は歎くとも、後に悅びなり。

氣激し言昂りて、終に「我國の亡びんこそ淺まし、國は亡ぶとも謗法は少くならん」など、大膽に言つて居れども、內心は其處にはない故に、灸治や鍼治にて人の病を癒す如くに、後には悅があつて一時の歎を忘れるといつて居る。こゝがよく〳〵眼を留むべき要點である。

所が是等の言辭は、一も宗敎家らしくなくて政治家的である、しかし日蓮は當時の方便としてかく政治上より威しつけねば到底最後に出でたる己が宗旨を世に立たしむることが出來ないと知つて居た故に、殊更に此擧に出たもので、これは彼の心事を酌量せねばならぬ所である、こゝが即ち又日蓮の大野心家なる所以である。

（三）日蓮は信念ありや

問、然らば野心家の日蓮に信念があつたか。

答、なくてどうするものか、又日蓮ほどの信念を有つたら、世に成功せぬものは恐らくあるまい、彼は堅固なる大信念を有して居つた、

日蓮は信念あるや

それが彼の不屈不撓の大精神を成した根抵である、さらば如何なる信念ぞといふに、彼は「日本國を救いたい」といふ信念を有つて居つたもので、今日の如き政治のやり方ではいかん、又今日の如き宗教の立て方ではいかん、若し此儘にして置けば必ず早晩國を失ひ、民を誤まるぞと自信して、爲に政治上、宗教上にキック抗つたものである、故に曰く、我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならんとの誓願を立て、佛法の本意を王法を扶けて國家を守護し、風雨順次諸難を攘ひて、一切衆生を救ふにありと道破したのである、之か爲に立正安國論の絶叫となり、諸宗無得道の說破となつたのである、此日本國を塗炭の苦より救ふといふ救世主を以て自任したのが要するに彼の信念である。

抑も日蓮は日本國を助けんと深く思へども、日本國の上下萬人一同に國の亡ぶべき故にや用ひられざる上、度々仇を爲す、されば力及ばず山林に交はり候、又大蒙古國より寄せて候と申せば皆人當時の壹岐對馬のやうにならせ給はんこと思ひやり候へば涙も留まらず云々。

抑々日本國を助けんと思ふ赤心より、かく法華眞實を稱ふるのであると斷言したものは即ち彼の信念を認むべき點である。

吾言を用ひずば國必ず亡ぶべし、日蓮は幼若なれども、法華經を弘むれば、釋迦佛の御使ぞかし、僅の天照大神、正八幡なんど申すは此國には重けれども、梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし、教主釋尊の御使なれば天照太神、正八幡宮も頭を傾け手を合せて地に伏したまふべき也。

世界の廣き上より視れば、日本國土の神の如きは小神ぞと公言した

日蓮は信念ありや

大膽さは豈に偉大堅固の信念を有して居るを立証するではないか。

(四) 上行菩薩の再來

問、日蓮が我國の救世主たる信念を抱き法華弘通の爲に活動したといふのは御説にて判りましたが、其信念を抱くに至つた根據は何處にありますか。

答、これが宗教家としての日蓮を始めて御話することの出來る點であつて、日蓮が自ら救世主なりと信じたのは、自ら本化上行菩薩の再來也と確信して居つた故である、さて考証家の大乘非佛説は先づ此には預りとして兎に角上行菩薩といふのは釋迦が法華を大成した時に佛前に誓つて「吾等佛の滅後に必ず廣く此經を弘めて退轉するとなかるべし」といつた所が、世尊之を嘉納して、菩哉々々上行菩薩

よとて「如來一切所有の法、如來一切自在の神力、如來一切秘要の藏、如來一切甚深の事、皆是經に於て宣示し、顯説せり、是故に汝等如來の滅後に於て、一心に受持し、讀誦し、解説し、書寫し、説の如く修行すべし」と示された所の菩薩の上首であつたのである、所が佛が曾て月藏菩薩に告げたまふて、「我が滅後に於て、五百年の中は解脱堅固、次の五百年は禪定堅固、次の五百年は讀誦多聞堅固次の五百年は多造塔寺堅固、次の五百年は我が法中に於て鬪淨言諍あり、白法隱沒せん」と告示せられたる末法二千五百年後の敎法の煙滅に歸せんとする時に、法華經弘通の附屬を受けたる上行菩薩が再來するであらうとは、佛家の間に傳へられたる豫言であつて、而も其國土は東方の小國である、東北に綠のある國である、唐の東、鞋鞨の西であると代々の高僧によつて註釋せられて居るによつて、

それは即ち日本であるといふことは、佛家の中には隱然傳へられて居つたものである、そこで我國に於ても叡山、三井、園城寺、高野根來と互に相爭ふ末法の世に上行菩薩として再來したものは予である、日蓮である、何故なれば我國に法華眞實の事を言出せる者は自分を除いて未だこれあらざる故であるとは、即ち日蓮其人の自信であつたのである、かく信じて居る處より、上述の堅確なる信念となつたものに外ならぬのである、

(五) 十界大曼陀羅

問、日蓮宗にては大曼陀羅の旗印を尊びますがあれは一体何ですか。

答、それは日蓮の信仰より立てたもので、曼陀羅とは輪圓具足とも功德衆とも譯して、佛の功德が一處に集つて居るといふ所より功德

衆ともいひ、又十界三千の諸法が圓滿具足して欠くる所なき故に輪圓具足ともいふので、即ち曼陀羅は佛の功德を一處に集めた表章といつてもよい、六つかしくいふと信仰の對象(めるて)を示したもので、元來日蓮宗にては、宗敎の三秘といふことを說き、釋尊が本化上行菩薩に附屬したまふた三大秘法がある、それは本尊、題目、戒壇の三つで悉く本門壽量品より立てたものゆへに、本門の二字を冠せてある、其第一の本門本尊が即ち十界の大曼陀羅であつて、日蓮信仰の對象であるのである、日蓮の示した本尊說は左の通りであるがこれにて彼の信仰幷に愛國の如何なるものなるかを推知せられる。

爰に日蓮いかなる不思議にてや候はん、龍樹天親等天台妙樂等だにも顯したまはざる大曼陀羅を末法に入て二百餘年の頃、はじめて法華弘通のハタジルシとして顯し奉る也、是れ全く日蓮が自作

にあらず、多寶塔中、大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊なり、されば首題の五字は中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩脇を並べ、普賢文殊等舍利弗目連等坐を屈し、日天月天第六天の魔王龍王阿修羅王其外不動愛染は南北の二方に陣を取り、惡逆の達多愚癡の龍女一座をなせり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神、十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照大神、八幡大菩薩、天神七代地神五代の神々、總して大小の神祇等体の神つらなる、其餘の用の体豈にもるべけんや、寶塔品に云く、接諸大衆皆虛空云々、此等の佛菩薩大聖等總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此御本尊の中に住したまふ、妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる、是を本尊とは申すなり。

日蓮は世界の救世主として日本に生じたと自信して居るのである。

(六) 四個格言

問、日蓮の四個格言とは何ぞや。

答、ツマリ諸宗無得道と說示するための日蓮の表題で、詳しくいへば念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊である、之を他宗を信じ他宗に藉を置く者の耳に聽き目に見たら妄言、狂氣とより認める外のないことは勿論である、然し暫く諸宗の立場を離れ憂世愛國の眼より悲觀して來れば、實に當時の宗教界は此妄言を一種の眞理と認めしめたに相違ない、かの源空の選擇集を明瞭すら辨拆して摧邪輪を著したのを見ても判る。

一体、歷史の上から見ても當時、念佛宗の唱へし所は、世界的であ

るだけ國家を遺れて居る傾がないでもない、政教明かに分離獨立した曉には之にて結構であるが、王法佛法幷び行はれて國家社會の發達を急ぎ、兩者互に輔翼して居る時代には、チト進み過ぎ居る、又其宗乘も愚民濟度には持て來いであるが、聖道門を一切打切りにして專ら淨土門に憑らしめたのは、餘りに碎け過ぎた看がある、近くは西園寺侯の一切打切りは、どうも首相の言としては親切でないとの批難もある如くに、專修念佛のみを必要とするとの言は他宗はすべて不必要ぞといふことに當るので、他宗の僧侶が承知をせぬのも最である、そこで日蓮は此一大勢力ある淨土宗の急所を衝いて、之を先づ避易せしめたのが即ち念佛無間說である、「淨土三部經なる者は、釋尊一代五時說教の內第三方等部の內より出でたり、此四卷三部の經は、全く釋尊の本意にあらず、三世諸佛出世の本懷にあらず、

只衆世誘引の方便に替ゆるなり」云々、「淨土宗には現在の父たる教主釋尊を捨て、他人なる阿彌陀佛を信ずる故に、五逆罪の咎めに依りて必ずや無間大城に墮つべけん、又釋尊と吾人とは、父子なり、君臣なり、師弟なり、誰人が信せざらんや、然るに淨土宗は主師親故に主に背く八逆罪の凶徒、父を捨つる五逆罪、師に背く七逆罪なり」云々、これが日蓮の念佛宗に衝きかゝつた最も鋭利なる論據である。

禪とても大梵天王決疑經の一卷が根據で、此宗旨は不立文字を榜標する所より經卷などには重きを置かない、達磨が支那へやつて來て言語が通せぬ所より面壁九年、無言の行で押通し、これが老子の所謂無の極意ぞと傳へて始めて禪は出來たなどゝいふ支那學者の言も、

萬更棄てたものでない、一体文字言語にに執着せずして、見性成佛せよと說くのは結構じやが、兎角は佛を呵し祖を呵し、何の事はない、己れ見性して佛に均しなどゝいふ增上慢は所謂釋魔に近い、即ち理性々々を言辭にして、反てむじな顏した野干道心では、日蓮ならぬも、固より禪天魔を言及したくなる、當時の禪界に必ず此弊のあつたらうと思はるゝは、禪宗が北條執權に尊重せられて居つた權勢で見ても其尊大の風がありはせぬと思はるゝのである、之が日蓮の禪天魔を揭げて世人に訴へた所以に相違ない。

眞言亡國も大日如來を立てゝ釋尊を疎んじ、己れを秘密敎と貴んで他を一切顯敎と斥け、斯土の佛を信せずして他土の佛を貴ぶといふは所謂亡國であると日蓮は說いたが、それならずとも、秘密敎の方便手段は我が神道をも大日如來の中に祀り込んだ大囊主義であつて、

惡く觀れば亡國の嫌もあるのである。

律國賊に至ては五戒、十戒、二百五十戒と戒律の必要を殊更に大乘出でし後に說き廻り、而も己れは堅固に持戒するよりも、外に賢善を裝ふて內に貪嫉を懷き、唯だ人に誇つて居る、所謂國法上には遊民で、佛法上には大乘の國を奪はんとする國賊であると、日蓮は擯斥した、之は當時の事實上かゝる傾のあつたものであらう。

要するに日蓮は此四個の一家言を按出して、之を天下の格言なりとし、眞額に振り翳して諸宗を粉碎せんとした、折伏門といふが之である、然し惡くいへば單純で獨斷的で、衆生濟度を本願とする宗敎家の言としては寧ろ不似合である、然し世間は王法も佛法も一つに觀て區別するものでなく、人情は奇を好み新を趁び、且つ又雷同附和して反動の大勢に乘ずることを快とするものゆへに、日蓮の此破

邪の手段は存外に世の認める所となつて、一の大なる勢力となつたのである。

(七) 立正安國論

問、日蓮の立正安國論とは、如何なる所論ぞ。

答、これは日蓮が當時の政治家をギョッとせしめた大膽巧妙の方便手段で、日蓮は法華眞實を說いて他力方便を棄てたけれども、これほど面白く方便を說いたものはなく、又他力を利用したものはない、ツマリ四個格言を諸高僧の腦をエグッたものとすれば、立正安國論は北條執權等の膽玉をデングリ返らしめたものである。

「藥師經七難の內、五難忽ちに起て二難猶殘れり、所以、他國侵逼の難、自界叛逆の難なり、大集經三災の內、二災早く顯はれ、一災

未だ起らず、所以、兵革の災なり、金光明經の內、種々の災過一一起ると雖も、他方の怨賊國內を侵掠する此災未だ露はれず、此難未だ來らず、仁王經七難の內、六難今盛にして一難未だ現せず、所以、四方の賊來て國を侵す難なり、加之國土亂れん時は、先づ鬼神亂る、鬼神亂るゝ故に萬民亂ると、今此文に就て具さに事の情を案ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡びぬ、先難これ明かなり、後災何ぞ疑はん、若し殘る所の難、惡法の科に依て並び起り、競ひ來らば、其時何爲んや、帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方の賊來て其國を侵逼し、自界反逆して其地を掠領せば、豈に驚かざらんや、豈に騷らざらんや、國を失ひ、家を滅して、何の所にか世を遁れん、汝須らく一身の安堵を思はゝ、先づ四表の靜謐を禱るべき者歟」とある文字は悉く鎌倉上下の武士

を驚かしたに相違ない。

所が面白いのは、此安國論は政治家に見せるもので、宗教家を驚かす文字でない故に、日蓮諸經を按ずるにと宣言して、諸の經文を引用し、此通り他國に殷鑑がある、戒心せよ、一日も早く邪宗を棄てて正法に歸せよと嚇かした所は中々拔からぬ權略である。

蓋し日蓮は「日本國を救はん」との發願を立て、自ら救世主たるの信念を養ふて居る、それゆへに他國にあつた災害を今更日本國に被らせたくはないが、今や邪宗を信ずる報として現に天災地妖を被つて居る、此上尙ほ悛めずんばそれこそ最後の大難なる外寇が襲來して來るぞと、當局者を警醒せしめたのが即ち立正安國論で、時は文應元年七月執權に呈したものである。

一寸年代紀を繰つて見ると、寶治二年には六月鎌倉に雪が降り、翌

翌建長二年には鎌倉地震し、それより年次變災相踵ぎ、建長六年にも大地震起り、翌々康元元年赤斑瘡流行し、其翌年正嘉元年には太政官廳火け、京都灰を降らし、鎌倉大地震起り、翌二年には八朔大風にて穀稼を傷け、翌正元元年には疫癘流行し、翌文應元年四月二十九日には鎌倉大火あり、尋で秋大風人を殺し、弘長三年には京都諸國大風の災を被り、終には文永年間蒙古初度の襲來となつた、日蓮の所謂鬼神先づ乱れて時ならぬ風雪、不慮の地震火災頻々として起り、萬民疑惑の中に上を怨み下相爭ひ、國民の一致を欠くゆへに、外國より其釁隙を窺ふて侵逼するのである、こは經文の示す所で、之が實に我國の事實となつて顯はれた、そこで日蓮はどうしても邪宗を退治せねばならぬと說破したのである。

(八) 豫言の根據

問、然らば、日蓮は全く一世の豫言者なるか。

答、然り大なる豫言者である、然しながら豫言といふ事は必ずしも神の夢告を蒙むるとか、一種の眼力があつて、將來を豫測するといふことのみではない、日蓮は國を救ひたい一心から、諸經文を按して外冠來を警告したが、これは中れば大變ゆへに用心をさつしやい、中らねばよいが、つら〳〵天變地異の起るのを見ると、神佛は既に邪宗門の弘通を憤りたまふて居るゆへであらうから、一日も早くグヅグッせずと、法華眞實の敎法に改宗せらるゝがよい、これは當局者として必ずかく計らふべき義務があると叫んだものに相違ない。然し天變地異に續いて外冠が襲來するであらうと日蓮が其の自信力

を強めた根據は、必ずしも經文を深く信じたのみではなからう、法華の外には他の經卷を信せぬと主張する日蓮がかく諸經文を引用したのは、當局者を警告する所謂一種の方便で、內實は當時に於ける世界の形勢といふものを暗知して居つた故に相違なからう、それは如何の根據かといふに、事聊か歷史に亘るゆへに眞面目に聽いて貰いたい。

平家の外交策が源氏に滅ぼされて埋沒し了り、北條氏が源氏の故智を襲ふて、外交は鎖國で一切打切り、世界の大勢を知るには僅に方外の徒即ち僧侶に依つたとは當時の歷史の証明する所である、早い話が源氏一門が當時入宋した榮西禪師に歸依して、鎌倉に壽福寺を建て、北條時頼が入宋歸朝の上曹洞禪を開いた道元禪師に歸依して菩薩戒を受け、名を道崇と號して建長寺を創立し、後更に蜀の人蘭

溪道隆が筑紫より京都に入り、轉じて鎌倉に來たのを時賴之に歸依して、建長寺の開山祖とし、時賴の子時宗が溫州の能仁寺で南下の元兵に苦められた祖元禪師を我國へ迎へ入れ、先づ建長寺の住持とし尋で圓覺寺を創して之が開山祖としたといふ如きは、必ずしも宗乘に歸信したのみではない、恐らく此等方外の徒を導ひて外交の機密に參與せしめたものに相違ない、即はち時宗が斷乎として元使を斬り、之が東侵の勢力を打碎かうと決心したのも、實は祖元の敎訓に基いたものである、此等の機密を元朝にても薄々感づいたと見へて、入侵失敗後、補陀落山如智長老の陳奏を納れて同寺の僧一寧と釋子曇とを使者として來らしめ、言を講和に托して、我が內情を窺はせたのであつた、此時に當りて我が九州諸港と支那の浙江、福建兩省の諸港とは、交通の頻々たるもので、彼我の商船は始終往來して居つたのである、乃ち浙江省寧波府の四明天童山幷に同省臺州府の天臺山へは榮西も道元も詣で學んだもので、又同本山よりも諸高僧を派遣して禪敎を布敎せしめたものであつた、蘭溪道隆の爲に北條氏に紹介せられた兀庵普寧は道隆と同じく西蜀の人で、同じく大休正念は溫州の人で、何れも北條氏に愛顧せられて居る、又我國よりは博多の人道祐入宋し歸朝後は洛北妙見堂に隱れ、駿河の人辨圓も入宋して歸朝後、博多に崇福寺を開き、同時に宋人謝國明が博多に承天寺を搦めたのに請せられて寺主となり、後ち東福寺の創せらるゝや出でて開山祖となり、後更に鎌倉龜谷に館して北條時賴に禪戒を授けた、又順德帝の第三子義尹は道元禪師に參し入宋十餘年にして歸朝し、始め博多の聖福寺に寓し、後肥後に如來寺を創め大慈寺を建立した、此等の事蹟にて當時方外の徒の、彼我往來の頻繁であつ

たことが判る、特に此に注意すべきは建長寺の道隆が時頼に歸依せられて後、時宗の時に至て流言を放たれ、甲州に謫せられて三年其地に留り、一度歸來して再び流言の爲に甲州に移つたとや、兀庵普寧が單獨にて博多に來り聖福寺に寓し、後鎌倉に入込みて建長寺に寓し、執權時頼の卒するや普寧歸國の志を抱き、衆の沮むをも聽かず、無心にして此方に遊び、有心にして宋國に歸るなどゝ公言して、終に歸國した如き事蹟である、恐らく道隆は元の間諜ならんと疑はれ、普寧の如きは或は元の秘密を托されて居つたものかも測られない。かゝる狀態であつた故に若し外寇來を叫ぶならば必らず禪徒の口より發しさうなものであるが、其然らざりしは、人心の疑惑を憚つて寧ろ北條氏より口止めせられて居つたに相違ない、此時に當り野心滿々覇氣縱橫なる日蓮は必ず此邊の消息を解し、此等秘密を探ぐる

ことを見逃すものではない、されば日蓮は叡山、三井兩山の遊學を終るや、當時宋國より歸朝して深草に隱れたる道元に謁して其教を受け、又入宋歸朝の辨圓にも稻荷山傍に謁して、之が教を受け又泉涌寺に宋の道隆を見て其弟子となつて居る、書生時代の日蓮は當時蓮長といつて二十五六歲、所謂一介の味噌スリ坊主として深草稻荷山泉涌寺などに苦學したものに相違ないが、世界の形勢に通ずるといふ事は、此時に於て必ず必要視し、又必ず將來の趨勢を探ぐることを怠らなかつたに相違ない、或はいふ日蓮は夙に海外の形勢に心を潛めたもので、自ら筑紫邊までも旅行し機密を探つたともいひ、又自己と氣脈を通ずる僧侶を海外に派遣して、宋元の形勢を探らしめたとも俗說に傳へて居る、彼としてあり得べき消息で、彼は此等の點より後來の元寇を豫言したものに相違なからう。

(九) 國家的觀念

問、段々と御說を承つて見ると、日蓮は餘程國家的觀念に富んで居つたやうですが、實際どれ程まで國家を憂へたものでせう。

答、さればサ、日蓮の國家を憂へたといふ事は、彼が自ら救世主を以て任じて居つたのでも明白で、宗敎家でありながら、彼れほど國家國家と叫んだものは少い、後世蓮如上人などが王法爲本などゝ榜標して、皇室の式微に御味方したとは大に其趣を異にして、彼は一面政治家といはるゝ態度で愛國憂世の熱情を披瀝したものである、之を蓮宗弘通の方便とか、或は日蓮の仮面とか惡評するものもあらうが、アノ位熱情があるのを見ると、日蓮の誠意も酌んでやらねばなるまい、現今の名士でも口では愛國とか憂世とかいつて居るが局

に當つて見ると存外誠意の欠乏して居るのを見ると、自体、腹にない愛國呼はりは實際上にはどうしても現はれて來ないものと見へる。

閑話休題、日蓮の國家的觀念は、要するに彼の國粹論から出て居るのであつて、當時の佛敎各宗が兎角、世界的に偏して國家外護の敎旨となつて居ないのを慷慨したものと見へる、蓋し南都の佛敎が行基、良辨等の高僧に依て我が古來の宗敎なる神道と接近したことは著しきものであるが、兎に角王法と佛法とを連結せしめたものは叡山の傳敎大師最澄である、彼は日枝山麓の神祠の申し子なりと稱し、白髭明神の靈告を蒙りて、叡山三堂を建立して天台宗を開基し、延曆十三年平安城の新建成就し、桓武天皇、平城より遷幸あるや、命せられて帝都を安鎭結界し、それより叡山を鎭護國家の道場として、天下泰平の護持を爲すことゝなり、名を延曆寺と賜ふたほどである、

されば天台宗は一に山王一實の神道とも名づけ、我國神代の大地主神なる三輪神は實は夙に佛化に浴されたもので、叡山なる大宮權現垂迹の地が最初の遺蹟で、再度に佛法弘通を約せられたのが自顯明神であると說き、爲に日吉神與を擔ぎ廻すに至つたものである、ッマリ釋迦、藥師、彌陀の三尊の光を放ちたまふた其三の字に縱橫の一點を加ふれば山王の文字となる、山は高大にして動かざるもの、王は天地人の三方を經緯するもの、所謂王法佛法の根據は一實なりと說いたもので、比叡の轉訛即ち日枝はやがて日吉となつて、名神大社なる日吉神與は叡山の徒の奉ずる所となつた者である、此等は慈本の一實神道記を見ても、天海？の山王一實神道原といふ書を見ても、幽玄の意義明白であるが故に、就て見るがよい、兎に角天台宗にて代々旨く神佛を習合せしめてより佛は諸神の本懷なりとあつ

て、一方に我が國家を忘れざらしめたものであつたが、淨土宗の源空に至ては愚民濟度の方便として聖道門を閣き、專ら淨土門のみを掲げ、敬神の一事を雜行の內に拋ち、專念彌陀一佛に歸依せしめた故に、天台眞言を始め南都六宗の迫害を受け、特に叡山の怒に觸れて、山王七社護法善神、諸宗誹謗のことを謝罪したる起請文をさへ徵せられ、重ねて七ヶ條の起請文をも山門に收められたが、尙ほ南都興福寺の憤解けずして源空は流罪となつた、之は一には他宗の嫉みにも出て居るが、淨土宗が餘りに王法佛法の關係を疎外した點に基して居る、さればこそ興福寺奏上の九ヶ條中に、邪宗を立つるの罪、神靈に乖背するの罰、國家を亂壞するの賊なる三ヶ條をも堂々と標榜したのである、さすがに親鸞は此點に就て思慮を廻らし、愈專修念佛の宗旨を擴めながらも、成佛の正因は信心を以て本とし、

報謝の最要は稱名を以て足れりとすと立てゝ、更に「念佛まふさん人々は、我身の科はおぼしめさずとも、朝家の御爲に國民の爲に念佛を申し合せ玉ひ候はゞ、めでたく候ふべし、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩の爲に御念佛心に入れ申して、世の中、安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしと覺え候」と言出するに至つた、これにて如何に實際上、念佛宗の興起が我が敬神の道を輕んぜしむる結果を生じ、爲に國家的觀念を薄からしめたかを推測することが出來るのである。

日蓮はかゝる信仰上の趨勢が、必ず國民一部の反動を惹起すことを豫期して居つた、それは必ずしも神道家の反抗のみならず、我が敬神の念慮に養はれたる國民の心裡には、一種信仰上の疑惑を喚起したに相違ないと看取し、日蓮は主として念佛無間說を鼓吹し、諸宗

無得道を唱道したのみならず、己れ自ら神道の研究を思ひ立つたのである、蓮長の本國に歸らんとするや、山王の宮に詣でゝ傳敎大師の廟を拜し、それより五條橋邊の天王寺屋淨本の家に滯在し、其人の紹介を以て四天王寺に到り、聖德太子の舊記を閲し、それより八幡宮に詣で、近江を廻りて伊勢に出で、太廟に詣でゝ、間の山に百ケ日間宿泊し、發願して「夙に佛屬を禀けたまふ神、今此正法の行者に力を戮せて弘通せしめたまへ」と祈誓を籠めたといふは如何に敬神の道を重んじたかをトせられるのである、これが爲に我が天照皇太神に配する日輪の一字を取つて、自ら日蓮と改名したなどゝいふは、愈々以て其志の敬神に存して救世を誓ふたものなるかを推知せられる。

(十) 樂天主義

問、少し話が外れますが、樂天主義と厭世主義とは、どちらがよいでせう、日蓮法華宗は特に樂天主義のやうに見へますが。

答、樂天と厭世の兩主義に就て、どちらがよい抔と斷言することは出來ない、一体物事は悲觀すれば心配のもので、樂觀すればさう心配するにも當らない如く、兎に角、物には兩方面の觀察が必ずクッ付いて廻る、日露戰爭でも其通りであつたが、充分悲觀した上で之に打克たうとて斷然樂天的に飜つて奮鬪した故に、今日の勝利を得ることが出來たので、悲觀必ずしも非なり、樂觀必ずしも是なりといふことは出來ない、されば何人でも必ず口にする所の「生ある者は必ず死あり」といふ言葉を捉へて、遲かれ早かれ死ぬ命なら生は

惜むに足らない、又何もヤキモキと心配して働いても無駄じや、唯だ極樂往生でも願ふて死後の冥福でも修して置かうなどゝ考へては、ソロ〳〵悲觀の虫に腹を害はれて厭世主義になつて仕舞ふ、之を又反觀して早晩死なねばならぬ故に命ある中に、成るべく働いて旨い物を食つて置かう、面白いものも見て置かう、何も死後の心配までするに當るものか、靈魂は生命の終ると共に吾人の肉体と分離するものゆへに、若し有つたにした所で何の苦にもならぬではないかと考へるに至つては、全く樂天主義になるが然し醉生夢死して禽獸に擇ぶ所なしといふ弊に陷る、然れば此の樂觀と悲觀とは何れも誤まつて居るのであつて、悲觀して未來までも思ふのは結構じやが、此世を果敢なしと見るのが間違つて居るし、又樂觀して命が短かい故に働かうといふのは結構じやが、どうせ浮世は三分五厘をキメ込む

に至ては是亦間違つて居る、こゝは吾人に於て須らく開悟一番して所謂サトリを開き、吾人は短き命ゆへに働かねばならぬし、又善を行はねばならぬ、何故ならば、吾人の此世に生るゝや醉生夢死するためでない、一日も早く此世を眞の極樂淨土即ち完全圓滿なる文明開化の世の中とせねばならぬのであるゆへに、これは生を稟けたる吾人の責務として後代子孫の爲めに、其目的を成就するやうに代々奮勵せねばならぬと開悟した日には、そこに希望も出來れば、向上的精神も起るといふもので、斯てこそ人は萬物の靈たる甲斐もあるのである、希臘の或哲人も難船せんとして死を恐れた時人の之を訝かるに答へて、吾人は死を恐るゝにあらず、徒に死するを惜むのみと言つたと聞くが、丁度之は澤庵禪師が將に死せんとする時の辭世に「死にたくない」と書いて家光將軍を驚かし、重ねての問に「本

當に」と書き加へて、愈々吾人の生命の貴重なる所以を諷示したのと東西符節を合して居る、然らば厭世主義は元々間違つて居るか、餘り樂天主義に失するのも當を得て居ない。

所で念佛宗の唱ふる所は專ら死後の極樂往生を說くのであつて、吾人は即身の彌陀となつて善を行へと說く人もあるけれども、どうも其處までは手が屆かず、矢張り蓮如上人の白骨の御文に隨喜の涙をこぼして、兎角此世を厭ふ傾を生じて居る、然るに日蓮宗はさすがに神道を加味して居る所より、萬燈を振り立てゝドコドンドンと叩き廻り、樂天主義に失して居る。

一体、我が國は古來豐葦原瑞穗國といつた如くに、氣候は温和で、花咲き鳥謳ひ、五穀は人の力を多く用ひずして、成熟するといふ、地球上他に比類のない結構な國ゆへに、此土を目指して天降つた人

種は餘りに樂天主義に失してどうも怠け者が多い、即ち古來の宗教なる神道は現世主義で、未來主義ではない、そこへ人の老病死苦を種に未來主義、厭世思想を蒔いたけれども、眞正に發達はして居ない、其証據には、昔し穢多非人と賤まれた部類の人には、間々堅門徒もあるけれども、一般は念佛宗に歸依して居つても、ソレ不動サンの緣日、水天宮樣の緣日として、御百度を踏んで現當の利益を頼りに祈つて居るのが十中の八九である、所謂未來主義よりも現世主義で寧ろ現ナマ主義である、日蓮が此人種の特色を觀破つて現世主義、樂天主義を振廻したのは兎に角一見識である。

（十一）諸佛本懷論

問、諸神本懷とか、諸佛本懷とかいふ御言葉がありましたが、一体それはどういふ事です。

答、それを知らねば眞の日蓮を知ることが出來ない、又日蓮宗の妙味をも知ることが出來ないのです、全体、佛敎の我國に入り來るや、傳道上第一に苦痛を感じたのは古來の敬神の道です、それを神佛を、習合して、神といひ佛といひ、其名は異なれども其本源は一なり、印度にて之を佛といひ、日本にて之を神といふ、神佛即ち全体なりされば佛を信ずることは神の本懷にして、佛法は決して神意に悖るものにあらず、從て我が國体を害せずとは、高僧碩德の苦心せし所にて、我國の古傳を研究すれば或は此結論に到着するかも測られない、此に於てか印度を本地とし、日本を垂迹地として、爲めに本地垂迹の說起り、之によつて南都の佛法は榮へて天照皇太神の本地なる盧遮那佛は帝都の中央に屹立したまへり、傳敎、弘法益々其說を

敷衍、擴張して、愈々其習合説の基礎を固め、佛教爲に神道の迫害を受くるとなく、信仰上、國民を滿足せしめて、終に弘通するに及べりとは、これは先づ何人も承知の事であるが、それに就て淨土宗にては苦心して諸神本懐といふことを唱へた、源空の言に「それ佛陀は神明の本地、神明は佛陀の垂迹なり、本にあらざれば迹を垂ることなく、迹にあらざれば本をあらはすことなし、神明といひ、佛陀といひ、表となり、裏となりて、互に利益を施し、垂迹といひ、本地といひ、權となり、實となりて共に濟度を致す、但し深く本地を崇むる者は、必ず垂迹に歸する理りあり、本より垂るゝ迹なるが故なり、ひとへに垂迹をたふとむものは、未だ必ずしも本地に歸する謂なし、迹より本をたれざるが故なり、此故に垂迹の神明に歸せんと思はゞ、たゞ本地の佛陀に歸すべきなり」とあるのは、如何にも

我田引水的によく説きつけたものである、然るに終には口がすべつて覺えず神明を蔑めして居る口吻となつた、源空の言に「凡夫の迷へる心を以て神恩を求めて福あらんと思へば、福は來らずして禍は轉た多し、年を連ねて病める牀に臥し、耳しゐ、目しゐ、腰折れ手挫けて神明に承け事ふる者、此報を受く、如何か棄てゝ彌陀を念じ奉つらざらんとなり、誠とに現世の福報は來らずして、反りて災難を與へん、實社の神につかへて、一分も其要あるべからず、ひとへに彌陀一佛に歸し奉りて、淨土を願はゞ、諸々の神明は晝夜につきそひて、守りたまふべきが故に、諸々の災禍も除かり、一々の願も滿つべきなり、權社の神は喜びて擁護したまふべし、本地の悲願にかなふべきが故なり、實社の神はおそれて近づかず、諸々の惡鬼神をして、たよりを得せしめざるが故なり」云々、此〻點を施した所は

須らく注目すべき要點で、一面より神は餘程馬鹿にせられたもので、これが本懐とは有難迷惑な次第であらう。

所が日蓮は念佛宗の此諸神本懐論には反對で、後には諸佛本懐の言をすら唱へたものと見へる、彼の國粹的念慮より見れば然るべきである、即ち佛を本地とし神を垂迹とする事には異論はないが、其佛とは釋迦一佛であれば、神佛習合をいふ時には、釋迦以來の諸の佛は之を見て本懐と思ふたに相違ないとの說である、これは一寸面白くコネ廻したものである、日澄の神道秘訣に「諸神の本地は佛菩薩なり、諸佛菩薩の根本は又本地の釋迦一佛なりと治定し訖つて、釋尊出世の本懐は法華經なれば諸佛菩薩並に垂迹の諸神も、法華を以て本意とする事を知るべきなり」云々、また「仍て神明の本地皆三界有緣の教主、法味は併ら諸佛本懐の妙法なり、然る處に末世愚昧の

男女、諸宗諂曲の法師に敎へられて、上一天の君王より下四海の萬民に至るまで、唯我一人本佛を捨てゝ、他方無緣の迹佛を信ず、一佛生滅の惠日を奪ひ、東西二佛の緣日に付けて、釋尊の供養を削り、彌陀の信仰を勵ます、是れ法然雜行の勸め、達磨超佛の憍り、弘法驕中の謬より起るなり、然れば則ち本地の釋迦を捨てゝ垂迹の諸神を崇るは、天月を覆ふて水月の光を賴み、根本を切て、枝葉の榮を待つが如し、愚迷至極の人にあらずや」云々とあるは、必ず祖意を敷衍したもので、要するに日蓮の眞意であつたと見るも差支あるまい。

此に於て日蓮は慈覺智証兩大師以後、叡山、三井にて習合を助長した三十番神說を引き來り、益々之を敷衍して、本地なる釋迦一佛を守護するために、我國垂迹の諸神は月の三十日を以て、替る〳〵法

華經の守護番をなさることゝなつたと說いて居るが、之は唯一神道の卜部家に學んで、之を自家の藥籠中の物としたに相違ない。

（一）勢田大日（二）諏訪普賢（三）廣田勢至（四）氣比、大日（五）氣多文殊（六）鹿島十一面（七）日比野十一面（八）江文地藏（九）貴船不動（十）伊勢大日（十一）八幡釋迦（十二）賀茂釋迦（十三）松尾毘婆尸佛（十四）大原彌勒（十五）春日釋迦（十六）平野釋迦（十七）大比叡大宮釋迦（十八）小比叡二宮藥師（十九）聖眞子彌陀（二十）客人十一面（廿一）八王子千手（廿二）稻荷如意輪（廿三）住吉虛空藏（廿四）祇園藥師（廿五）赤山馬頭（廿六）健部大日（廿七）三上千手（廿八）兵主文殊（廿九）苗鹿地藏（三十）吉備虛空藏などゝ三十番神を立てゝ我國の諸神は法華經を守護したまふと說き、日蓮自らは七字の題目說を東方日出の時に唱道したりとて、法華行者を以て自任したのであつた。

（十二）法華眞實論

問、然れば日蓮の法華眞實論の根據はどこにあるか。

答、これは極肝要な點であれども、反て極單純なもので、日蓮は藏經を幾度も繰返したといへども、頭から法華を眞實として他を容れないものゆへに、幾度見たとて法華眞實の証據より外擧る筈がない、全体、日蓮が法華を眞實と認めた根據といふは、後世法華を眞實に見せる爲に作つたと稱する無量義經に「種々說法以二方便力一、四十餘年未レ顯二眞實一、我所レ說諸經、法華最爲二第一一」とあり、法華經に「唯有二一乘法一無レ二亦無レ三」とあるを唯一の金科玉條として、所謂無二無三に他經を擯斥し去つたものである、それゆへに蓮長の日蓮が始めて說法をしたといふ時の言に、「我れ年來、一切經を見亘り廣く諸宗を

學びたり、八宗見ざるなく、十宗閲せざるなし、大集月藏經の第九の卷を見るに、釋尊入滅してより五百年の間を解脱の時といひ、次の五百年を禪定の時といひ、此千年を正法といふ、又次の時を讀誦の時といひ、次の五百年を造塔の時といふ、此千年を像法といふ、此二千年を終りて、後五百年を白法隠沒の時といふ、是れより一萬年を末法といふ、今末法に入て二百年、當生の衆生は本末不善とて、本より不耕不耘、種々植えざる赤凡夫なり、法華經方便品に曰く「未ダ曾テ汝等ニ成佛ヲ得ベキノ道ヲ說カズ、未ダ曾テ說カザル所以ハ、說時ノ未ダ至ラザルガ故ナリ、今ハ正ニ是レ其時ナリ、決定シテ大乘ヲ說ク」と法華經法師品に曰く「我ガ說ク所ノ諸經、此經ノ中ニ於テ法華經最第一ナリ」と法華經一之卷に曰く「十萬佛土ノ中唯ダ一乘ノ法ノミ有テ二モ無ク亦タ三モ無シ」と觀無量壽經に曰く「佛

眼ヲ以テ一切ノ諸法ヲ觀ルニ宣說スベカラズ、所以何トナレバ、諸ノ衆生ハ情欲同ジカラズ、性欲同ジカラザルガ故ニ、種々ニ法ヲ說ク方便力ヲ以テノ故ナリ、四十餘年ハ未ダ眞實ヲ顯ハサズ」と、今や天下八宗九宗あれども、皆方便の敎にして、佛の眞實の敎にあらざるなり、我れ二十三ヶ年の間、鎌倉、京、叡山、園城寺、高野、天王寺を經て、倶舍、成實、律、法相、三論、華嚴、眞言、是等の諸宗を研めたるに、皆世尊本懷の敎にあらず、偶々天台のあれば、今や眞言と混じて其眞を滅せり、噫、「末法の衆生は何の處にか成佛を得べき」云々とある、これが抑々法華眞實の根據であるが、日蓮の大袈裟なる頭腦は此一本鉢にて他宗を排するの利器に供せんと思ひ附いたもので、誠に左もあるべきことである。

思ふに當時の天台は慈覺以後眞言と混じ、又南都六宗も振はず、反

て念佛と眞言と禪とが各々跋扈せる世態であつた故に、日蓮は此末法を悲んだには相違なからうが、さて之を匡救するには法華經より外ないと言つたのは或はこれより以上に他の方便なく、之より以上に他宗を避易させる利器なしと見た故に、彼は故らに金科玉條と法華經を振り翳し、無二又無三に斬廻したものでもあらう。

蓋し法華經は天台宗唯一の所依で、智者大師は其註釋を爲すとて、十卷の文句と、十卷と摩訶止觀と、十卷の玄義とを作つて、所謂天台の三大部を大成し、妙樂大師また更に玄義を註釋して十卷の釋籤を作り、文句を註釋して十卷の疏記を作り、止觀を註釋して十卷の弘決を作つた故に總註、總べて六十卷、即ち天台の六十卷を成して法華經は大層むづかしさうになつたけれども、曹溪の六祖も嘲つた如く、法華經一部八卷二十八品中、見るべきは僅に方便品のみにし

て、これとても唯有二一乘法一無二亦無三と大話するのみで、其然るべき所以を說かない素人だましである、又圭峯の宗密の貶した如く、法華の文は勝曼、圓覺等四十餘部の經よりも劣つて、馬鹿々々しいのみとは、考証派學者の等しく批判する所で、既に彼是れ批評するにも當らない、要するに有難いぞといつて、其有難い所以を說示せねば、懸空の言たるを免れないのである、然しそれを知りつゝも之を捧持したのは、日蓮の巧な所で、やがて之より題目說を按出し、南無阿彌陀佛と六字の名號を稱ふれば、往生疑なしと念佛宗の說くに對立して、南無妙法蓮華經と七字の題目を唱ふれば成佛疑なしと說くの方便に供したものに相違ない。

然し法華經にて念佛を挫くといふことは、よく研究して見ると、實際は不可能である、法華經の譬喩品に「我昔從レ佛、聞二如是法一見二諸

菩薩に受記」と記してあつて、釋迦は已れ以前の諸菩薩より記を受け教を請ふたと說くを見れば、決して法華經以前の經說を棄てよといつたものでないことが判る、又法華經の文中に「唯一心念」といひ、又は「一聲南無佛、皆已成佛道」とあつて、念佛の功德を稱讚して居るのを見ると、南無阿彌陀佛で成佛が出來ぬとケナスことの出來ないことになる、然るを日蓮は知つて知らぬ振りに、これ等の文字は棄てゝ顧みず、直に四十餘年未だ眞實を顯はさずの無量義經の文字を證據に、獨り法華經のみを取て一切他經を取らず、其の譬喩として塔を組む足代の如き念佛は塔の出來上つた後は不用に屬すと言つてのけたのは、如何にも素人を威服せしむるに妙を得たものである。

(十三) 法華題目說

問、さらば題目說の根據は如何に。

答、これが又中々面白い、日蓮の考では法華經の文句に「擁護受持法華名者」とあるのを見附け出して、法華の名を擁護受持する者は功德ありといふ以上は、專ら法華經の名を稱ふるがよい、即ち專ら之に歸依すべきであつて、念佛に南無阿彌陀佛といふ如く、歸命の意なる南無の二字を取て、南無妙法蓮華經と唱ふるならば、必ず功德ありいふ勘定であるとの說明である、所が法華經の擁護受持の眞意は「之を受け持つは不信にしてあるよりも功德あるべし」との意であるのを、是非とも之を擁護受持せよ、必ず功德ありと日蓮の說いたのは聊か獨り免許の嫌があると考證家は說いて居る、それはど

うでもよいとして妙法蓮華經と唱へたら何故功德があるか、一体これは何の意であるかと尋ぬるに、これは天竺にては、薩達磨（サッタルマ）、芬陀利（プンダリ）、修陀羅（シュダラ）といふ語で、漢譯して、サッタルマが妙法、プンダリが白蓮華、シュダラが經となるので、ツマリ天竺にては花の王として白蓮華を愛する所より、此經文を蓮花の如くに愛らしく貴き妙なる法なりといつたに過ぎない、引くるめて言へば有難いお經で御座るぞといふ意であれば、有難いお經に歸依しまつる〳〵と連呼したのみで、果して功德があるか、成佛を遂ぐるものか、チト受取り難い說である、然し日蓮は六字の稱名に對して七字の名號を唱へしめたもので、どこまでも念佛の向ふを張つたもので、矢張り愚民濟度の本願に外ならぬのである。

日蓮の言に「正直に方便を捨て、但だ法華經を信じ南無妙法蓮華經

と唱ふる人は、煩惱業苦の三道、法身般若解脫の三歸と轉じ、三觀三諦、即一心に顯はれ、其人所住の處、常寂光土なり、一度も妙法蓮華經と唱ふれば、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王、帝釋、閻魔、日月衆星、天神、地神、乃至地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天、一切衆生の心中の佛性を唯一言に喚び顯し奉る功無量無邊なり」とあるのは、如何にも大袈裟にかぶせかけたものである。

（十四）女人成佛說

問、日蓮は女人成佛の事を如何に說きましたか。

答、女人成佛の事は淨土宗で始めて明かにしたものであつたが、日蓮は之に對して、女子は法華經の功力によらなければ決して救はれ

ないと言明した、一體熱帶地なる印度にては、婬欲の發達が早く、之によつて身家を誤まるものも多きゆへに、女子は一層賤しめられたものと見へる、法華經提婆品の說によれば女人の身には五障を備へて、梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身となることが出來ない、それゆへに龍女は忽然變じて男子となり菩薩の行を具して南方無垢世界に往き、寶蓮華に坐して等正覺を成したと示して居る、これは全然女人は成佛を得る資格なきもので、若し女身にして成佛を欲せば、男子と變生するより外に道はないとて、一切女子を壓へ附けたものである、けれども方便を主とする佛法にてかく說示したのみでは衆生濟度が出來ないゆへに、法華經藥王品には「若し女人ありて、是の藥王菩薩本事品を聞きて、能く受持せんものは、是の女身を盡くして後に復た受けず」と示すに至つた、これは藥王品を受持する

時には女人は成佛を得ぬものながらも、其五障を脫して再び女人には生れて來ないと說いたもので、女子壓制の手は少しく弛められたものである、所がこれにても女子の滿足すべくもない所より、無量義經にては、「女子あり、我が名字を聞きて歡喜信樂し、菩薩心を發して、女身を厭惡せんに、壽終の後復た女像とならば正覺を取らず」と記して、成佛の誓に洩れざらしめんとした、けれども尙ほ壽終るの後に女人とならしめぬと誓ふただけて、女人が現在此世に於て成佛し得る事の誓言を得て居ない、所が支那の善導大師に至て、其他力易行門を擴張する方便として、女子は此世にて彌陀によつて救はるゝことを說明した、「乃ち彌陀の大願力によるが故に、女人にして佛の名號を稱すれば正しく命終の時、乃ち女身を轉じて、男子となることを得、彌陀手を接し、菩薩身を扶け、寶花の上に坐し、佛に

隨ひて、往生して佛の大會に入りて、無生を証悟せん」「一切の女人若し彌陀の名願力に因らずんば千劫萬劫恒河沙等の劫にも終に女身を轉ずることを得べからず、或は道俗あつて、女人淨土に生ずることを得ずといふものは、此はこれ妄說のみ、信ずべからざるなり」云々とて念佛宗にては、全く女人成佛を印可したのである、それゆへに我國にても、佛教が傳はつてより女人成佛を得ぬを歎いたのを、念佛宗にては、專ら之を救ふことを言明し、特に罪障深しといふ遊女なども源空上人などには、專ら歸依して隨喜の涙を垂れた、源空の言に「阿彌陀佛の本願に、我が名號を念せば、必らず引接せんと仰せられたれば、決定して攝取せられ奉るべしと深く信じて心に念じ、口に稱するに物憂からずして、すでに往生をうち固めたる思ひを爲して、歡喜のしるしには、南無阿彌陀佛〳〵と唱へ居たれば、

自然に三心具足のいはれあるなり」とあるのは、よく〳〵專修念佛の有難きを說示して、女人を其の宗下に引入れたものなることが判る。

所が日蓮に至ては例の如く、法華眞實を稱へて一切他經を棄て去る筆法ゆへに、此念佛宗にて女人の成佛し得るをも難し、法華經の功力にあらずんば、女子は決して成佛する謂れなしと公言した、女人成佛抄に「殊更、女人成佛の事は法華經より外は更に許さず、結局爾前の經にては夥だしく嫌はれたり、されば華嚴經には、女人地獄獨使三能斷二佛種子一、外面似二菩薩一內心如二夜叉一云々、銀聲女經には、三世の諸佛の眼は拔けて大地に墮つとも、法界の女人は永く成佛すべからず、云々、或は又女人には五障三從の罪深しと申す、其は內典には五障を明し、外典には三從を敎へたり、云々、釋迦多寶の二佛

塔中に往生したまひし時、文珠妙法を弘めん爲に、海中に入りたまふ、佛前に歸り參りたまひしかば、寶淨世界の多念佛の御弟子智積菩薩は龍女成佛を難していふ、我見釋迦如來於無量劫難行苦行、積功累德求菩薩道未曾止息觀三千大千世界乃至無有如芥子許、非是菩薩捨身命衆生故等云々、所謂智積文珠再三問答いたし給ふ間、八萬菩薩、二千聲聞等何れも耳をすまして御聽聞計にて、一口の御助言に及ばず、然るに智惠第一の舍利弗文珠の事をば難ずることなし、多くの故を以て龍女を難せらるゝ所以に、女人は垢穢にして非是法器と、小乘權教の意を以て聽かせられ候ひしかば、文珠龍女成佛の有無の現証は、今佛前にして見へ候ふべしと仰せられしに案にたがはず、八歳の龍女蛇身をあらためずして、佛前に參詣し、價値三千大千世界と說かれて候ふ如意寶珠を佛に奉りしに、佛悅んで之を請け取りたまひしかば、此時智積菩薩も舍利弗も、不審を開き、女人成佛の誘をふみ分け候、されば女人成佛の手本是より起て候」とあるのは、法華經の功德によつて、女人は必ず成佛し得るといふ券証を示したものである。兎に角婦人問題といふものは今日でも中々厄介なもので、女權の發達したといふ歐米でも、矢張り之には苦んで居る、それをタラシ手馴けて、從順の美德を養はせるといふ事は、經世家の一日も忘るべからざる所で、日蓮も此點には特に留意したものに相違ない。

(十五) 攝受門

問、日蓮の折伏門の事は大分承知しましたが、其所謂攝受門とはどういふ事ですか。

答、眞實の御話をいふと、日蓮の攝受門といふ方が折伏門よりは一層苦心の跡を見るべき點で、此事は日蓮を知るには必らず了解して置かねばならぬ、前にもいつた通り外部に向つての活動と內部に於ける基礎を鞏固にすること の兩方面を、よく使分けるのでなくては世に豪傑といはれぬ如くに、日蓮が外部に向て折伏の劍を振ふと同時に、內部に向つて攝受の固めをしたといふのが、即ち單に强いといふばかりでなくて眞にエライ所である。

さて題目說の根據は、既に說明した通りであるが、日蓮はシツトリと此說を普及せしめんが爲に所謂攝受の門を開いた、法華經安樂行品に「他人の好惡長短を說かず、乃至問に隨て說を爲す」とある所より、實は矢鱈に喧嘩を吹懸けるのみが能事でないと悟つて、日蓮は天台の理三千より進んで事の三千說を立て、丁度眞言宗に敎相、

事相を分つた如くに、理相、事相を區別して、事の三千說を立て、先づ三種の利益即ち即身成佛に三義を立て、(一)當体即成、即ち我等凡夫の當体が即、本覺無作の三身にして、三世常住なりと觀ずること、(二)受持即成、即ち南無妙法蓮華經を受持すれば、自然に佛果を感得す、所謂妙法經力の即身成佛、(三)修得顯現の即身成佛即ち修學解行して、漸次に、本有の三德を光顯し、法界圓融して大用現前する、以上の三種ありと說き、就中受持即成に重きを置いて、乃ち前に述べたる題目說を高め、一心に南無妙法蓮華經と唱ふれば必ず成佛得道すべしと敎ふるに至つたのである、これは日蓮がよく各宗の敎旨を明らめた結果で、即ち顯密兩敎の妙所を結び付けた上に、淨土易行の說をも附加へて、所謂換骨脫体とやらかしたのである。

この受持即成即ち題目説に就て、日蓮はさすがに旨いことを言つて居る、四信五品抄の中に「小兒乳を含むに、其味を知らざれども、自然に身を養ひ、老婆が妙藥誰が辨へて之を服せる、濁水情なけれども、月を浮めて自ら清めり、草木言はざれども雨を得て自然に花さく、これ豈に覺の力ならんや、妙法蓮華經の五字は文にあらず、義にあらず、唯だ一部の意のみ、初心の行者其義を知らざれども、之を行すれば任運に其意に契當するなり」とあるのは、誠に恐入つた名言ではないか、恐らく日蓮の此甘言には其説教を聽かされた凡夫どもはコロリと參つて心服したに相違ない。

一体、譬喩といふ事は言語文章に必要なもので、之を話色ともいつて居るが、人心を感動せしめるには此譬喩に限る、マホメットでも耶蘇でも孔子でも、其所謂經文は譬喩の所に妙所が籠つて居る、就

中バイブルなどと來ては全然譬喩の文字で、其たとへの旨さに聽衆は納得して降參したものである、それで日蓮を他に比較して論評する者もあるが、つまり此譬喩の妙に氣附かずして、徒に性格が似て居るとか、何とか感心したもので、矢張り日蓮の舌に捲込まれた一人である。

(十六) 日蓮の傳記

問、日蓮のエライ點を段々と聽聞しましたが、日蓮の傳記を知らぬ故に、どうも譯り兼ぬる點があります、ザット懸直のない所をお話下さい。

答、さうです、ツイ日蓮の特色を示すために、覺えずお話が抽象的になりましたから、然らば概略の傳記を述ぶることゝしませう。

日蓮の傳記は極有難く出來たものと、旨くケナシてあるものとの兩樣があります、眞實傳といふ方が其有難い方で、深密傳といふのが、ケナシてある方でありますが、一方は小川泰堂の著述、一方は淨土宗學徒の手に成つたものであらうとの專ら評判であります、さればこの一方の書を見て日蓮を知らうなどゝ思ふと、大なる間違が出來るので、馬鹿に有難い御上人に拜まれたり、イヤ早やあきれた山師坊主にも見へます、それで居士はザット御祖師樣の傳記といふ者を何となくお話しますが、日蓮は安房國長狹郡東條村の生れで、幼少から才學衆に秀でゝ居つた所より同郡の千光山淸澄寺に送られて、道善和尙に從學することゝなり、儒佛の書を習ひましたが、師僧も行末頼母しと見て取り、十八歲の時に、其子供を親より貰ひ受けて小僧となし、名を是性字を蓮長と呼はしめ、幾くもなく灌頂を授けて、

眞言宗の僧侶としました、然るに日蓮は疾くも諸國修業を志し、廿一歲にして鎌倉に出で、光明寺の然阿上人に侍して淨土の宗義を聽き、翌年轉じて叡山に遊び東塔の圓頓房、橫川の定光院等に住して、天台の奧義を探り、住山三年にして四年目に三井園城寺に入り、幾くもなく京都に出で、當時宋國に遊んで禪を修めて歸つた深草の道元、稻荷山の圓爾に就いて道を問ひ、又泉涌寺に入つて宋僧道隆に侍して禪を問ひ、爲に將來の書籍を繙き、其より南都に遊びて、興福、元興以下の七大寺に入つて六宗を究め、進んで高野山に登り轉じて東寺に入り、又仁和寺に學びて眞言宗を修め、翌年再應叡山に歸り、翌々年四天王寺より科長の太子廟を拜し、又男山八幡宮に詣で、近江路より轉じて伊勢に入り、太神宮を拜して、百ヶ日の間、間の山に籠りて祈誓を凝らし、其より古鄕に歸らんとて武藏國川越

に留まり、終に鄕里小湊村に父母を歸省し、父と共に清澄寺に登り、再び鎌倉に出でゝ、比企三郎より儒敎を學び、下總土橋の東漸寺に行きて一切經を閲し、漸く清澄寺に立ち歸つたのが抑々日蓮の修學履歷で、それから建長五年四月廿八日、東日、海上より昇る時を以て始めて南無妙法蓮華經と唱へ、其日直に一山の衆を集めて、多年の勤行漸くにして無上菩提を得たりとて、終に法華の妙理を說くと共に、他宗の非を訐きて、かの四個格言を唱道したのであります、所が此狂僧奴、何をホザクかとて地頭平景信は淨土宗信者である所より、大に憤怒し、今にも捉へ殺さんとしましたから、日蓮は逃れて全國西條に匿れ、それより鎌倉に出でゝ、己が敎法を弘めんため、先づ名越の松葉ヶ谷に草菴を結んで其處に留まり、時しも明慧上人が摧邪輪を著して法然上人の選擇集を駁したのを、日蓮は其所論五

十步百步の相違のみとて、爲に守護國家論を著して兩つながら、之を駁論し、それより鶴ヶ岡經藏に入りて、數月間其異書を閲し、終に街頭に立ちて法華眞實、諸宗無得道の大道演說を始むるに至つた、そこで諸人驚き怪しみ、中には種々妨害を加ふる者もあつたが、漸くにして有力なる信者を得、全時に天台の僧成辨を得て、日昭と改名せしめた、此日昭か中々の傑物で、かねて法華純一の旨を執つて一宗を組織せんと考へて居つたから、そこで日蓮の大膽なる行動に感服をして自ら其弟子となつて、宗乘組織の點に力を盡すに至つたのである、恰もポーロの耶蘇に於ける如き關係である、かくて翌六年四月日蓮は三十番神を勸請し、又弟子日朗、日興を得、全時に有力の信徒を得たが、意氣雲を凌かんづ日蓮は中々これにて滿足せず、時しも天災地妖相踵けるを見、特に鎌倉に大地震があつて、人心恟

惱たるを好機とし、爲に一書を執權北條時頼に致して、弊政を改めしめんとし、更に去つて駿河岩本の實相寺に入り、普ねく經藏を探つて、佛法眞を失へる故に、時の祟あるものと認定し、一篇の勘文を奉行の手を經て執權時頼に致した、これが即ち有名なる立正安國論である、時に之を見たる執權の驚きよりも、他宗徒の騷は大變なものであつて、かゝる狂僧を活かし置くべからずとて、突然名越の菴室を襲ひ、日蓮をして辛うじて下總富木に逃れしめたが、日蓮は之にも屈せず、再び盛り返して鎌倉に入來つた故、執權時頼は治安を妨害すとて、捕へて伊豆の伊東に配流した、それより日蓮は艱苦の中に節を持し、反て諸士を歸依せしめ、四十二歳にして赦免に逢ふて鎌倉に歸るや否や、又候大聲疾呼して四個格言を唱へ、爲に地頭東條左衛門の襲擊する所となつたにも屈せず、轉じて上總、下總、

常陸、下野の諸國を巡教し、其間日向、日頂の二高弟を得、偶々文永五年蒙古の牒狀我國に來つて、國内動搖し、安國論の言的中した所より、日蓮は乃ち奉行宿屋左衛門に書を送つて、己れ獨り蒙古を調伏するの資格ある者なりと告げ、同時に建長寺、極樂寺、大佛殿別當、壽福寺、淨光明寺、多寶寺、長樂寺にも書を送つて、對決を促がし、熱心勇猛に他宗を排斥した、そこで終に問註所に召喚せられて鞫問を受けたけれども、日蓮は之に屈せずして滔々、正理を執て之と爭ひ、それが爲に奉行よりの兵士三百人に菴室を取圍まれて廚にせられ、文永八年九月十二日スハヤ龍ノ口にて刑せられんとしたが、執權時宗より死一等を減せられて、越後を經て佐渡に配流せられ、大野塚原の菴に放逐せられた、けれども日蓮は毫も屈する色なく、益々法華を顯揚し、留まること三年にして、赦免を得、文永

十一年三月鎌倉に歸着し、五月宗門弘通の免許を得て、爾後勇氣百倍し、熱心に布教して、爲に大學三郎を歸依せしめて、其家を寺と爲し、又さしもの宿屋左衛門をも歸依せしめて邸内に一宇を建てしめ、進んで甲州に入り、身延の幽閑を愛して草室を起し、轉じて信州葛木まで巡教し、再び身延に歸りて、靜かに讀經著述に從事したが、後には大伽藍の基を起して身延山久遠寺と稱し、弘安五年八月、心地例ならずして、武州池上宗仲の邸内なる本門寺に入り、日昭以下の六老僧を集めて之に遺言し、六十一歲を以て入滅したのであつた、剛毅不撓にして目的を達したものである。

(十七) 日蓮の素性

問　日蓮の素性は穢多であるなどゝいひますが事實でせうか。

答　穢多か何か判らぬが、兎に角素性の貴つとかつたものでないことだけは事實である、それは日蓮聖人の系圖といふものは立派に出來て居れども、日蓮は元來、賤しい身でも成佛が出來るといふ手本を示したもので、親鸞上人とは正反對に自己の地位を示して衆生濟度をやつたもの故に、其眞意は蓋し素性の貴きを願はなかつたものに相違ない、之を本化別頭佛祖統紀とか一代化導記などゝいふ書には麗々しく日蓮の系圖を原ねて、大織冠鎌足の苗裔貴名次郎重忠の子なりと載せ、又外戚の系圖をも清原氏といつて、舍人親王の裔山崎左近從五位兼良の女梅菊なりとか或は一說には畠山氏の族上總國大野吉清の女梅千代であるなどゝ載せてある、恐らくこれは最負の引倒しで、日蓮の本意ではなからう、それといふのが日蓮の自著なる佐渡書といふ書の中に、「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀

羅が家より出でたり、心にこそすこし法華を信ずたる樣なれども、身は人身に似て畜生なり、魚鳥を混丸して赤白二諦とせり、其中に識神をやどす、濁水に月のうつるが如し、糞嚢に金をつゝめるなるべし、心は法華經を信ずる故に、梵天帝釋をも猶ほ恐ろしと思はず、身は畜生の身なり、色心不相應の故に、愚者のあなづる道理なり、心もまた身に對すればこそ月金にもたとふれ」云々、とあるのが明かなる証據である、自ら旃陀羅の家より出でたりといひ、又再三畜生に等しき身と公言して憚らぬ所を見ると、反て其賤しき素生に甘んじて居つたものなるを解せられるではないか。

蓋し旃陀羅とは天竺の言葉で、漢譯すれば屠者ともいひ、又嚴熾ともいふ、屠者の方は舊時穢多の職として居つた屠殺業者で、嚴熾とは「印度にて路を行く時に鈴を搖かし竹を持ちて目印しとし、常に

人と別居し、城市に入る時は竹を槌ちて其異なるを示せば、人之を避く」といふ極めて疎外せられて居つた下賤の人種をいふのである、然れば日蓮は穢多非人ならぬにしても、父は漁夫で母も賤しい者であれば之を決して掩ひ飾らうとはしなかつたのである、系圖を貴ぶ世の中に、これは又エライ一見識ではないか、恰も太閤秀吉が尾張中村の百姓の子であつたといふので其出世が一層際立つて見える如くに、日蓮も卑賤に生れて一世の救世主となつたのであるから一層有難くも見へ、又かくてこそ成佛の手本を一般國民に示して餘程利き目があるのである。

然るを世間凡俗の眼ではどうも氏、素性や系圖を貴くも戀しくも思ふ所より、一向宗の祖は攝政關白の裔であるに、我が祖が卑賤者ではどうも溜らぬなどゝて、父を大織冠の後裔とし、其名門の裔がな

せ安房の邊鄙に住んで耕漁の賤業を營んで居つたかといへば、實にコレ〳〵だと遠州貫名郷を領して居つた同國國司少納言共資六代の孫孫四郎政直の後が即ち貫名次郎重忠といつて日蓮の父、此人一朝平氏の謀叛に與みして、若松の壘に籠つた所より、其罪によつて安房國に竄せられたものなりなどゝシチ面倒な系圖を擔ぎ來るに至つたのである、又母の素性も賤しくては耻辱であるといふ所より舍人親王の後裔清原氏であるといひ、或は聖武天皇の孫三國大夫の裔なりといひ、日蓮の生るゝや妙星天子が梅の木に天降つて此女の腹に宿り終に誕生ましたのであると附會した。かゝる餘計な心配をする所より反て他の駁擊する所となり、種々の馬倒說を出さしめたが、特に神道家の平田篤胤などに考証的の眼を鋭くせしめて、「日蓮の系圖は寛永年中に幕府で撰んだ寛永系圖中の井伊家の處を其儘に

うつし取り、之を種に僞作したもので、かの系圖に井伊太郎盛直の子貫名四郎其子直行といふまでが寛永系圖、それより以下が全く僞作である、トいふのは日蓮の系圖は房州小湊の誕生寺の什物から出たといふけれども、それは享保、寶暦時分からの言草で、其以前に作つた住益讃などゝいふ書にトント此系圖の記してないので明瞭である」などゝ穿鑿し、且つ又一層毒舌を弄して、日蓮の父母を罵り「實に日蓮が自ら記し置いた如く、穢多の子に相違なく、其生れたる故は、遠江國周智郡貫名村の女が安房國小湊に來て、或る百姓の所に奉公して居たるが、穢多と密通して、日蓮は其中より生れたるを、怒つて其主人が其子をある寺の梅の木の下へ棄てたるを住持が拾つて育てあげたものに違ひない」などゝ大膽にも公言せしめて居る。然し固と〳〵日蓮自ら旃陀羅なりといつて居る以上は、宗徒たる者

は、誰がなんと言はうとも、顧みるに足りない、即ち砂中の金剛石にして始めて光を發する如くに、下賤の中に生長してこそ、愈々日蓮の光も增すといふものである、古來より王侯將相何ぞ種あらん、人は氏よりも育ちが肝要といふではないか、して見れば餘りに附會して反て其皮を剝かれるやうな系圖呼はりは固より日蓮其人のために取らない所である。

(十八) 龍ノ口の法難

問　然れば日蓮の素性はそれにてよしとして、かの刀が折れたといふ龍ノ口の法難は如何でせう。

答　これも餘りに業々しくお祖師樣を記し奉つたゆへに、反て反對派に色々の穿鑿をせられて、所謂イタクもなき腹を探らるゝといふ

結果を來して居る、思ふに龍ノ口の法難といふことは固より事實であるが、日蓮宗の信徒として、祖師の偉業を書彰したいために、所謂譬喩の繪畫を作り出し、經文に刀及段々壞等の記事がある所より思ひ付いて、此法難に宛嵌めたものでもあつたらう、實は寧ろ罪のない無邪氣なやり方であるのを兎角日蓮宗の覇氣あるを惡む反對派が多いゆへに、そんな馬鹿氣た事があるかと、躍起となつて打壞しにかゝつたものである、日蓮記といふものを此方で書けば、挫日蓮といふ書を彼方で作り、又此方で挫日蓮笑解といふ書を此方で作り出すといふ狀況で、何の事はない、言はゞ小兒の喧嘩を見たやうな騷ぎをやつたものである。

然し世間は妙なもので、日蓮ほどの信念ある者は、其法力の作用にて、之を頸きらんとする刀も折れやうなどゝ言ふものもあり、中に

は釋迦、龍樹以下の高僧が行つた所の幻術的作用で、越智三郎の振り上げし腕も自然に精神的に鈍つたものであらうなどゝ利口をいふ、そこで考証家はさう迷ふにも當らない、此に大なる証據があるとて抹殺的筆法を用ふるに至つた、「日蓮記に記してあるなどゝいふのは、後世の僧どもの僞言で其元は佛祖統紀といふ赤縣（シナ）の佛書に、某といふ者が日頃、觀音を信じて居つたが、罪を犯して首を切られやうとしたる時に太刀が折れたといふ妄說を取つて、源平盛衰記に、主馬判官盛久が事にして記したが、それを取つて盛久の謠にも作つてあるを、日蓮宗の僧どもが盜んで、日蓮の事に作りなしたもので御座る、論より証據は日蓮自分の事を記し置きたる文章どもに、トント記してなく、たゞ引縛りて馬に乘せられ、由井ケ濱近くの旅宿まで引出されたが、其内に免された事ばかり記してあるで御座る」と、平

田篤胤は公言し、尙ほ其証として、當時の赦免は全く道隆の取なしによつたものとて、其時の日蓮の書を掲げて居る。

昨日拙僧於濱邊可爲斷罪之處、以大禪士之御慈愛、減死罪一等、可被處遠流候、誠禪師之大恩、生々世々難忘、昨日御慈悲之無賢使者、日蓮并門徒之滅亡無疑、後日有露命者、何豈不奉報其恩也、右之通侍者中宜敷請上達

文永三年九月十四日　　日蓮百拜　在判

建長寺方丈大和尙

之に附記して、「此書は先年近江の人德永如心茂彦が寫し來つたので御座る、以前は毎年土用干の時に見せたるが、或時に日蓮宗の廻し者が來て盜まうとした故に、其後は容易く見せぬといふ事じや」と載せて居る、平田の考証も餘りに穿鑿には過ぎて居るが、當時建長

寺の道隆が其曾て徒弟たりし日蓮の爲に、命請ひをしたといふことは必ず有り得べきことで、又日蓮最後の宗門弘通の免許を北條執權より得たのを見ても、道隆の回護は必ずしも想像說に止まらぬのである、然しかゝる無益の論爭は此位に留めて置いて、さてかく刑場の人となつた日蓮の態度はどうであつたかといふに、實に泰然自若のものであつたらしく、彼の自信力の如何に鞏固であつたかを想像せられる、虛か實かは測られぬが、當時日蓮が公言したる所として傳ふる言葉に「各々喧しくしたまふ勿れ、日蓮最後に臨んで八幡大菩薩にいふ所あらんと欲す、八幡大菩薩、眞神か邪神か、昔し和氣清麿首刎られんとしたる時、天に月と現れ、傳敎大師宇佐八幡に法華經を講せし時、紫の袈裟を布施せしと聞く、今、日蓮は日本第一の行者なり、今生に三災七難を攘ひ、未來に無間地獄を助けんために、

演る法門なり、大聖世尊靈山に於て法華經末法に廣る時、天照八幡は行者を守護すべきこと三度も誓ひしにあらずや、今、日蓮頸切られん時は、釋尊に對して日本國の八幡は邪神なりと言上すべし」とある、後世の附會としても、恐らく日蓮に此位の氣魄はあつたに相違ない。

(十九) 身延の退隱

問　日蓮は何故終に鎌倉を見棄てゝ身延へ退隱したのでありますか。

答　そこには大に秘密の事情があるやうです、一体、日蓮の四個格言を唱道したのは方便にして他宗を折伏せんと期したもので、これが徹頭徹尾成就するものとは日蓮其人といへども信じて居なかつたに相違ない、それで兎に角日蓮、法華宗といふものを世に高めたなら

ば、其後は專ら此宗旨の勢力を維持せねばならぬ、それには宗乘を完全に組織する必要がある故に高弟と共に攝受門といふものを豫め研究して置いたので、それゆへにこそ日蓮は佐渡へ流された時、「佐渡の國へ流され候ひし已前の法門は只だ佛の爾前經とおぼしめせ」と公言して居る、恰も釋迦が法華以前に方便として諸經を說いたと自白して居るのと同じ型である、されば日蓮は殊更今後は他宗折伏の旗を高く揭げるにも及ばず、兎に角他宗と共に對立して之に警醒を與ふれば足つて居る、自分の法華宗を唱道して國家と宗教との關係を世に示したればこそ世人は始めて國家の重んずべきを知り、諸宗も大に顧みる所があつたのである、さらば折伏の旗を飜へした目的は既に達せられて居るものゆへに、先づこゝらで切上げて、今後は攝受の一門で衆生濟度の本願を他宗と共に引受けて然るべきで固

より能ふ限りは宗風を顯揚すべきではあるが在來の如く、大に他宗を敵とするに足らないと看取したものに相違ない。

日蓮にして此心掛となつたなれば、他宗も之を毛嫌ひするにも當らない故に、鎌倉にては日蓮を赦免し宗門弘通の牒狀を與へたものに相違ない、「此年許多眞法之威力御感最深、三國無比類妙宗、後代難有僧、何宗比之、日本國中弘宗門事不可有妨也」と城左兵衛が執權時宗の意を奉じて日蓮に與へたといふも、よく〳〵觀察すると、此邊の事情を解することが出來る、所が日蓮は執權等の改宗せぬを見て太息し、爲に身延へ退隱したと日蓮の徒はいふけれども、それには餘りに薄志弱行である、恐らく日蓮は此時既に折伏の目的も達した故にオトナしく攝受一門でやらう、それには自身鎌倉にあつて大聲疾呼しては矢張り軋轢を生ずる基と、早くも其炯眼より看取し

た故に身を山水の裡に沒して韜晦したものに相違ない。

うつぶさにふす夜のあまり寢られねば
月を身延に起きかへるかな

彼の霸氣はこゝに鎭靜と共に春風の如くになり、而も其性情として之を壓へ切るに苦んで此感慨を洩したものに相違ない、さればこそ弘安四年蒙古攻來るの報あるや、弟子信者の豫言的中を喜べるに對し、日蓮は騷擾すべからずとて、「小蒙古の人、大日本國に寄せ來るの事、我が門弟幷に檀那等の中に、若し他人に向て、將た又た自ら言語に及ぶべからず、若し此旨に違背せば、門弟を離るべき等の由存知する所なり、此旨を以て人々に示すべく候也」と示したのである、此文中に蒙古を小蒙古とし、日本を大日本といつたのは、以前大蒙古來るとて他を赫かした筆法と正反對で、こゝ等がよく〳〵日

蓮の心事を窺ふべき要點である。

それを或論者が、身延の退隱を以て、日蓮が佛罰の蒙古軍を甘受する爲に然りしものなりなどと推斷して居るのは、全く歷史を明かにせざる過誤で、日蓮はそんなに融通の利かない馬鹿正直の男ではない、若し蒙古襲來を佛罰として甘受する爲に、身延へ退隱するほどならば、何も豫め蒙古來を呼ばはつて、當局者を警醒する必要がない、又佐渡配流以前の說敎を、佛罰前の經に全じなどと言譯けをするにも當らない、何れにするも此推論は、日蓮にカブレたる迷妄である。或はいふ日蓮は身延に根據を据へ、武藏野に廣く其勢を張り、アハヨクば鎌倉北條を討たんとの計畫であつたと推測するものもあるが、日蓮折伏當時の猛勢を以て見れば、一面此觀察も浮ばぬでもないが、然し身延へ退隱した心事を解する者は、決して此觀察を正

當とは認めない、兎に角宗教家にして政治家の如くに世人より想像せられたのが、彼の愈々偉人なるを證明する所で、彼をして今少しく長壽ならしむれば又如何の捲土重來を演じて居つたかも測られない、要するに身延の退隱は彼の其境遇を自覺してジッと蟄をこらへたもので、固より其本意ではないけれども、亦止を得なかつたものに相違ない、そこで日蓮に不似合な晩年の行動を見て彼は何をか目論で居たのであらうと推測する所より、終に鎌倉乘取りの陰謀でもあつたやうに臆說を立てたものと見て差支あるまい。

(二十) 日蓮の人格

問　かく不思議なる日蓮の性行を認めるに就て彼の人格は如何であつたでせう。

答　吾人の見る所を以てすると、日蓮は必ず氣高い所のあつた人で、又甚だ德風の慕ふべきものがあつたと思へる、其氣高い所は人の仰いで凝視すべからざる威の備はつたもので、其德風の慕ふべき所は、人の必ず心服した所に相違ない、若し夫れ氣高いだけであつたならば、彼は必ず彼の大言壯語の爲に其身を誤まつて滿足に其生を完うすることが出來なかつたに相違ない、然るにアレ程の惡口、他宗より見れば雜言讒誣とも見做さるゝほどの行動を以てしたに拘はらず、終に生を完うしたのみならず、半ば其目的を成就し、當の敵たる道隆にすら其死罪を助命せしめ、其反對の宗門をも終に執權より弘通せしめたといふは、これぞ自然に備はる德風の慕ふべきものがあつた爲に相違ない。

之に就て日蓮の書といふものを閲するに、大に興味を感ずるのであ

るが、今は其一二を掲げて彼の氣高き品性の根據、幷に德風の慕ふべき根抵を示すことゝしませう、日蓮が佐渡に流罪の時、之を監守する本間重連を感服せしめ、其外冠來を豫言して終に宗徒たらしめた時の言が頗る大膽不敵で、此自信でこそ氣品の見るべきものを生ずると思へる、「日蓮は幼若なれども法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし、法華經の行者をば梵釋左右に伴ひ玉へり、日月前後を照したまふ、かゝる日蓮を用ふるとも惡く敬はゞ國亡ぶべし、何に況んや數百人に惡まれ、二度までも流されぬ、此國の亡びん事疑なし、且つ誡めて國を助けたまへ、日蓮が控ふればこそ、今までは安穩にありつれども、法に過れば罰は當るなり、又此度も用ゐずんば大蒙古國より打手を向けて日本國を亡ぼさるべし」とあるのは、自負廣言といふよりも寧ろ其熱心燃ゆるが如き忠誠を認むべきである。

又日蓮が佐渡へ流さるゝ時、共に捕へられて宿谷の土牢に押籠められたる日朗に對し、日蓮が送り來つた書狀に「日蓮は明日佐渡國へまかるなり、今夜の寒さに付ても、牢の內のありさま、思へやられて痛はしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親、一切衆生をたすけ給ふべき御身なり、法華經を餘人のよみ候は、口ばかり言ばかりはよめども、心はよめず、心はよめども身に讀まず、色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ、天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と說かれて候へば別の事はあるべからず、牢をば出でさせ候はゞ、とく〳〵來り給へ、見たてまつり、見えたてまつらん恐々謹言」とある如きは何と慈愛に滿ちたる文字ではないか。

（廿一）日蓮の感化

問　日蓮の感化は頗る大なるものと思はれますが如何です。

答　日蓮の感化ほど廣大なものゝないことは、日蓮歿後の同宗徒が覇氣滿々として不屈不撓で居たのを見ても、其冥々の感化の深きに驚かれる、それゆへに日蓮在世の間、現在其薫陶を受け、教訓に接したものは、弟子も信者も何れも堅固なる法華經擁護者となつたのである、これは全く日蓮の人格に感化せられたもので、智識は兎に角意志の力の強いこと丶、熱情あること丶は他宗に多く比類を見ざる所である、かの六老僧の行動の献身的であつた事は最も日蓮の感化の著しかつた徴證とすべく、特に其一人日昭が龍ノ口の難を逃れ名を晦まして形を潜め、時機を待つたといふ如き、或は又日朗が師

の伊東に流されんとするを見、之に隨はんと強ゐて舟夫の爲に其右腕を折られた如き、尙ほ日朗の名越の菴室に捕へられんとする時、十二三歳なりし日進が師を縛するならば我をも縛せとて、終に師と共に縛せられて甘んじて鎌倉の土牢に投せられたといふ如きは、如何にも悲絶悽絶で、日蓮門下の徒弟の何れも熱誠溢るゝ如き情炎を有して居つたことを看取せらるゝではないか。

尙ほ鎌倉土牢内の日朗が師の安危を氣遣ふこと甚だしく、轉輾反側して居る所より、牢守も之に心を動かされ、奉行宿谷光則に告げて、終に日朗をして佐渡に到るを許した所が、時しも一月積雪邊島を埋め寒風肌を劈く中を、晝夜兼行にて師を訪ひ、其姿を拜して後又もや牢獄へ歸つたといふ如きは到底語る能はざる底の熱情があるのである、又日興と熊王四郎の二人が遙々日蓮を佐渡に尋ねて其痩せた

る姿を拜し、且つ喜び且つ泣いて鎌倉の現狀を語つたといふ如きは、師弟の情誼掬すべきのみならず、其隱約の間に、日蓮の感化の如何に廣大無邊であつたかを推測せらるゝのである。

(廿一) 日蓮は偉人なり

問　前々よりのお話によつて日蓮のエラものなることを了解しましたが、之を英雄といひませうか、豪傑といひませうか、世の高僧碩德とは一種毛色を異にして居るではありませぬか。

答　左樣世間普通の高僧碩德とも異なり、又世に所謂英雄豪傑とも聊か其選を異にして居ります、一言以て掩へば偉人といつて然るべしと思はれるのである、兎角世間の所謂豪傑肌といふものは、思慮周密といふ點が欠けて居るとか、或は又德望の人を服するに足らぬ

點があるやうに見受けるが、日蓮はさすがに偉人だけあつて常人に一頭地を抽いて居る、又世の所謂高僧碩德は兎角人物が偉大ならずして或は陰險或は固陋惡しくいへば卑劣を免れない傾があります、然るに日蓮に至ては其卑劣がない、或は彼の行爲を固陋といふ人もあるか知らんが彼は自說を固執したので決して固陋ではない、陰險かといふに、彼は正面より他を攻擊すれども決して陰へ廻つて細工をする如きことはなかつた、どう見ても彼は眞の豪傑で眞の高僧を兼ね、即ち之を偉人といふより外はないと思ひます、然し偉人であるからとて其行ふ所は一に正義でなければならぬとか、或は又一々信念より發揮されねばならぬといふことはない、時には方便として權道に出づることもあり、又往々に秘密を藏して居ることもある、迚も神ならぬ人間に完全無欠を望むことは出來ないのであつて、先づ

先づ日蓮の如きは、百世の下苟くも世に事を成さんとする者の、仰いで模範とすべき大人物に相違ない。

彼の南無妙法蓮華經の七字が如何に今も信徒を狂氣の如くならしめるかといふことを思へば、世にこれほど馬鹿氣たことはないと考証家はケナすけれども、人情はさうしたものではない、恰も萬歳々々といへば、何も必ずしも萬年生けるに限つたものでないけれども、歡迎せらるゝ身になれば眞に難有いと感謝する如くに、七字の題目は成佛の正因であると信ずる所より、單に之を唱へてワーッと狂喜して居るのである、何も不思議はないではないか。

要するに日蓮の後世に與へたる精神的感化といふものは實に偉大であつて、法華經勸持品より得たる日蓮の堅忍不撓の精神を、日蓮宗其ものゝ生命として奉ずる所より、數百年の迫害を受けても屈せず

撓まず、其宗勢をして榮へしめて居るのである、又必ずしも日蓮信徒たらぬ者にしても日蓮の剛毅堅忍は之を大に學ぶべきものとして、百世の下に仰いで居るといふは、畢竟するに彼の愛國的精神に感化せられて居るのである、何故なれば本國を忘れたる國民の惰氣を警醒し鞭撻したのは、日蓮の題目說で、彼は之を以て政治上宗教上の兩方面より極めて峻酷凛冽に皷吹して休まなかつた故に、終に國粹論を勃興せしめて、我が弘安の勝利を來す結果を作り、又我が敬神の觀念をも忘失せしめずして止んだのである。此形蹟は明治維新後にも繰り返されて、一度は外國崇拜となり、更に國粹論の復興となつてよく日清、日露の戰役に大勝利を占め得たる結果となつて居る、これも日蓮間接の感化であると日蓮宗の人はいふかも知れない、

(廿三) 日蓮大菩薩

問　日蓮の事を大菩薩といひ大士といひ、聖人といひ、祖師といひますが、どれが一番本統でせうか。

答　そんな事はどうでもよい些細の事であるが序にお話して見れば、祖師といふのは日蓮法華宗の開祖である所より、祖師ぞと同宗信者の崇めたもので、他宗にお祖師様といふことは餘り言はぬ所より其株を日蓮に奪はれたものに外ならない、それから大士と書くのは、世間一般に大師といへば弘法大師空海のお株にして仕舞つた故に、日蓮は大士と書いたもので、且つ此大師號じやの國師號といふものは朝廷より賜はるものゆへ餘人がうかと大師國師を借しては、必ず御咎めを蒙むる所より日蓮は大士といふ文字を作り代へたものに相

違ない、聖人といふのも上人大和尚位といふ如きは、これも官位で聊か憚かる所があるゆへに聖人と書いたもので漢音でよめばセイジンであるが、呉音にてよめばシャウニンであるゆへに、上人と聖人との語音の等しい所を取つたものと思はる、特に世間一般にても聖人君子といへば人の貴む文字ゆへに旁々之を用いたものと見へる。

さらば菩薩號は如何にといふに、元來菩薩といふは詳しくは菩提薩埵といふのを約めての稱へで、菩提は先づ佛道といふ意、薩埵は衆生といふ意に當れば、菩薩は即ち佛道に入りし衆生とでもいふべき語である、されば日蓮ほどの大行を爲した僧なれば菩薩號にては尚ほ敬ひ足りぬ心地がせらるゝのであるが、世人はそんな意味合を知らぬ故に、弘法大師傳敎大師といふに比較して權衡上日蓮大菩薩といつたものに相違ない。

これに就て面白き一場の談話は、矢張り後世の宗徒の手に成つた法華三卷書といふものに「後光嚴院の文和元年、天下大に旱り、諸社に雨を祈るに驗なし、之に依て大覺上人に命ず、此年文和元年六月二十五日桂川の邊にて日蓮の像を建立し、雨を祈り、たちまち驗あり、依て日蓮大菩薩と勅筆を染めたまふ、御よろこびの餘り、日朗、日像へも菩薩號を賜はる、大覺へは大僧正の宣下あり、上古よりの菩薩號は行基、叡尊二人許りなり、然れどもこの二人、大菩薩にあらず、孫弟子まで菩薩號、誠にためしなきこと也」と有難く記したのを、例の平田篤胤は考証的に穿鑿して、これは以ての外の僞作じや、第一文和元年に大旱のあつたことは當時の記錄にも載つて居らぬし、雨を祈らるゝならば、上七社、中七社、下八社即ち二十二社の神社もあり、外に祈雨十一社といふ別社もある、若し又佛法に仰せて雨

を祈らるゝならば叡山、三井が受持で、日蓮宗などへ仰せ付けられて承知するものでない、況んや當時以前、日蓮黨といふものは、院宣まで下されて京師を追放せられて居る、それに何ぞや祈雨を日蓮宗なる身延の大覺に托せらるゝ所縁がない、別して大僧正の宣下があつたなどゝいふは吉田家の神道長上の綸旨を僞作したのと同一筆法で、且つ日蓮に大菩薩を賜ひ、日朗日像に菩薩號を賜ふといふ如きは同じく僞作に相違ないのである、菩薩といふ稱などは佛道に入りし衆生といふ意で誰が稱へた所で差支がない、朝廷にてもそれを御尤めのないのが即ち御國の政事の寛仁大度なる所以である、それを他の宗祖の大師號や國師號あるに比較して、何か適當の尊稱が欲しい所より、先づは差構へのない菩薩號に大の字をクッ付けて、日蓮大菩薩と稱したものに相違ないといつて居る、中々に皮肉な言草

ではあるが、理には當つて居る、然し何も日蓮を大菩薩といつたとて尤むるにも足らず、又大菩薩といつたとて大なる自慢にもならぬことで、これ等は日蓮其人に取ては寧ろ有難迷惑に相違なからうと思ふのである。

然し日蓮は宗教家であつて、大に政治家的の行動に出て居るから、菩薩といふよりも聖人といふよりも、大師といふよりも一層、大士と呼ぶ方が適當した文字のやうに思へる。

(廿四) 日蓮宗の發達

問　日蓮宗は日蓮歿後どういふ樣に發達したものですか。

答　日蓮宗の發達は祖師日蓮の覇氣を受繼いで代々迫害に反抗して、中々に目覺ましく發達したもので、其要をカイ摘んでいへば、日蓮

の高弟なる六老僧即ち日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の六人が宗勢擴張の爲に、それ〴〵力を盡して、本宗關東に於ける六大門徒なる、豆州玉澤の法華寺、池上の本門寺、及び其下に隷屬する比企谷の妙本寺、平賀の本土寺、駿州富士山の大石寺、及び北山の本門寺、並に身延山久遠寺及び其下に隷屬する藻原の妙光寺、下總眞間の弘法寺、駿州の蓮永寺など追ひ〳〵諸國に大刹が出來て門葉榮へ、六老僧の外にも十九人の中老僧並に九老僧があつてそれ〴〵に諸國諸山の基を成し、爲に京都妙顯寺を始めとして三十餘箇の大刹を留め、法華の法幢ます〳〵我國に高まつたものであるが、兎に角本宗の基礎を定めたのが、身延の本山を建て、恰も眞宗の本山本願寺を作つたやうにしたのに基して居る、これは日蓮の池上に入滅するや、六老僧相議して遺骨を身延に送り葬り、供養終つて後、日昭、

日朗以下それ〳〵に別房を同山に作つて一宗の事務を視る所の基を作り、それより日昭は南の房を作つて不輝院と呼び、日朗は竹の房を修して正法院と呼び、日興は林藏房を作つて常在院と呼び、日向は樋澤房を作つて安立院と呼び、日頂は山本房を作つて本國院と呼び、日持は窪の房を作つて本應院と呼び、俗子四條頼基また端場房を作つて住した故に、身延一山の形態備はり、爲に一宗の本山となつたが、弘安六年正月に六老僧相議して身延清規一策を作り、日蓮の遺命によりて輪次に塔を守り、一月毎に交代し、それより、六老僧池上に會合して、日蓮の手書を諸國に蒐集し、遺書百四十餘篇を得て之を錄内の書と名づけ、後又再度の蒐集を爲して貳百五十餘篇を得、其中より正しき者を拔き集めて錄外の書と名づけた、そこで錄内錄外の書が揃つて之を高祖遺文錄として出版するに至つた故に、

日蓮の人格、感化の程を窺ふとが出來るやうになつたものである。所が日蓮宗は始終他宗に反抗して世に立つ所より、朝廷或は幕府より治安維持を名として禁遏せられ、其徒は屢々追放せられ、特に不受不施派といふ如きは幕府の爲に禁制せらるゝに至て、一宗やゝ逆境に處することゝなつた故に、天台學といふのが日蓮上人によりて唱へらるゝに至つたのである。

さて少しく元へ復つて諸本山の成つた由來を見るに、日朗の弟子日像といふのが勇猛であつて、法難のために京都を逐はるゝこと三回なりしにも屈せず、遂に元亨元年、後醍醐帝の詔によりて具足山妙顯寺を創建し、建武元年勅願寺に班せられて、茲に京畿の本山となり、又甲州の日興は富士山大石寺を大成して興門派の開祖となり、越後の日印は日朗に從ひて、本國本成兩寺を創して本成寺派の開祖

となり、岩代の日什は富士山日尊に値ひ、妙塔山妙滿寺を創して妙滿寺派の開祖となり、越中の日隆は本能寺、本興寺を創して八品派の開祖となり、但馬の日眞は妙顯寺に遊びて若狹に本境寺を創し、攝津に久成寺を建て、京都に本隆寺を建てゝ法華勝劣派の開祖となり、京都の日奥は妙覺寺に學び、文祿元年師日興の跡を嗣ぎて、不受不施派を開き、山城の日講も妙覺寺に學びて不受不施の義を唱へたのであつたが、宗勢の擴張はよいが互に獨り自らを高うする觀があつて、各自孤立の形勢となり、特に不受不施派の如きは秀吉や家康の命に抗して配流せられ、年次禁遏せらるゝに至つた故に、宗勢反て非となるに至つた、これが爲に法運を旣倒に挽さんとて、本滿寺の日重起り、尋て日乾之に次ぎ、終に日遠となつて宗内の統一を計らんとするに至つたのである。

そこで本滿寺の日重は妙覺寺の日奥の唱ふる不受不施の義を排し、專ら力を一宗の敎育に盡し、日乾は此師の遺業を繼いで後、身延山久遠寺に住職となり、池上本門寺の日樹が不受不施の義を唱ふるを抑へ、其弟子日遠博學にして久遠寺に住職となり、師日乾と力を戮せて不受不施の法乱を鎭定して宗規を改革し、よく本宗中興の業を完きするに至つたのである。

一体、日蓮宗がかく内部の擾乱を來すに至つたといふは、攝受門をのみ執て世に立たうといふ議論と、折伏門を高めやうといふ議論とが、日蓮の歿後に二派となり、一時は鎭靜の觀があつたが、諸本山の興起と共に、漸次軋轢の端を生じたものであつた、これは素人の考としては日蓮宗はどこまでも四個格言で以て法幢を高めるに限ると思はれが、兎に角他宗と共に立ちて我國民の信仰を支配し、社會

整理を受持つからには、寧ろ攝受門を以て世に處するが至當と思へる、況んや勅願寺とまで許されたる本山あり、宗門弘通は兎に角朝廷の免許を得て居るからである、されば日蓮晩年の眞意を酌みて、兎に角、國敎としての態度と面目を持すが至當といふ所より、日蓮は宗學と共に天台學を唱道し、其折伏門を壓へて攝受門を榮へしめんとしたものと見へるが、之は局外者の觀察ゆへに、全く肯綮に中つて居るか否かは斷言し難い。

(廿五) 法華念佛の宗論

問　法華と念佛とは古來犬猿の間のやうに言ひますが、如何なる宗論をなしたものでありますか。

答　これも日蓮の人物に直接の關係なき事なれども、聊か知つて置く必要がある、就中宗論の激しかつたのは、後柏原帝の文龜元年で管領細川政元の下知に依り、五月二十四日藥師寺備後守の宿處に於て法華念佛の對面となつたのである、其時初番に出たのが淨土宗なる京都本覺寺の騰蓮社と、日蓮宗なる本國寺の正覺院と對論し、次番は淨土宗の妙光院と日蓮宗の賢大房と對論したのであつたが、二問答とも日蓮宗の負けなりとあつて、正覺院も賢大房も袈裟を剝ぎ取られたのである、これより民間にては愈々兩宗の爭論高まり、七十八年を經たる正親町帝の天正七年に再び衝突して、今度は右大臣織田信長の命により、五月二十七日江州安土の淨嚴院で宗論を開いた、事の起りは日蓮信者なる建部紹智、大脇傳助といへる者が、是非對論して兩宗の勝劣を判せんと請ふた所より始まり、即ち淨土宗よりは西光寺の聖譽上人貞安と正福寺の靈譽上人玉念との二人出で、

後詰として洞庫、助念の二人之に差添ひ、日蓮宗よりは頂妙寺の日銑、妙滿寺の日雄、妙覺寺の日諦、妙顯寺の大藏房なる四人出で、外に百餘人の後詰を從へたが、對論の結果又もや日蓮宗の負と判せられて、判者奉行は法の如く、日銑以下の三衣を剝ぎ取りて之を淨土宗の貞安に渡し、建部大脇の兩人は首を刎られ、日銑以下の四人は沙彌にせられ、同時に三奉行より、諸國の日蓮宗を悉く破却せんとありしを、同宗の僧侶連署して哀願した故に、漸くに退轉を赦免せられ、同時に赦罪狀として、「淨土宗と爭論して負けたる事、以後他宗に對し法難せざると、法華立て置かるゝを奉謝する事」を明記し、又「右の條々僞儀に於ては日本六十餘州の大小神祇、大乘妙典三十番神の御罰を蒙むるべし」と附記せしめられたのである、これは起請文であつて、妙覺寺以下十三大寺の住職連判し、之を菅谷、堀、

長谷川の三奉行に呈し、別に妙覺寺日諦、頂妙寺日銑、久遠院日雄よりの誓書を奉行に差入れて漸く事なきを得たのであつた。

所が此二回の敗北にも屈せず、慶長十三年十一月十五日德川家康の命により殿中に於て對論した、事の起りは、初め日蓮宗中の尾張熱田なる不受不施派の常樂院日經が例の四十餘年未顯眞實の文を記し、之を同所なる淨土宗西山派の正覺寺へ送つた所より、同寺は之を清洲の性高院へ告げ、性高院より上書して增上寺の存應に訴へた所より、存應乃ち之を將軍家康に達して此に對論となつたものである、そこで淨土宗よりは存應の高足廓山、論者として出で、日蓮宗よりは日經出づることゝなつたが、當日に及んで日經病ありと稱し、其弟子五人を引連れて出廷したのであつたが、又もや日蓮宗の負けとなつた、其時判者高野山遍照光院の賴慶僧都は勝劣既に定まれりと

て、役人をして日經子弟六人の法衣を剝がしめて之を廓山に捧げ、又日經等六人の面々をして交名連判して一通の負證文を出して退散せしめ、重ねて幕府を騷がせし罪を以て、日經子弟六人を京都に送り、翌年二月二十六日之を劓刑に處し、耳鼻を劓ぎ、手車に乘せて京中を引わたし、同年十二月幕府より池上本門寺、中山法華經寺、碑文谷等に令し、連署して謝罪狀を呈せしめた、池上の日紹、中山の日述、眞間飯高の日感、藻原の日僚、平賀の日悟、碑文谷の日揚の連名にて奉行に差出したものであつた、かくて同十四年幕府は甲州郡代大久保石見守に命じ、本山なる身延山久遠寺よりも証書を徵せしめ、又京都所司代板倉伊賀守に命じて、妙顯寺始め十五ヶ寺より同樣の証書を徵せしめたが、これは日蓮宗内に不受不施の邪義を唱ふる者ありとの尤であつた、所が此兩宗の對論は武士が常に淨土

宗の肩を持つて、便宜を念佛派に與へ、爲めに日蓮宗の負けとなつたとて、日蓮宗徒は益々憤懣した樣子であるが、これも同宗迫害の歷史の一に加へて差支ない點もあるのである。

(廿六) 日蓮宗の迫害

問　然れば日蓮宗といふものは歷史上如何なる迫害を受けて居るものでありますか。

答　これは後世の僧徒信者が祖師日蓮の覇氣を學んで其德望は反て薄く、所謂頑固執拗に失した所より、其所論は兎に角としても在上者は治安維持上、此宗徒を嚴罰せねばならぬことゝなつたものと見受けられる、日蓮歿後の伏見帝正應、永仁の頃に、公家武家一同評議の上、日蓮黨を禁制すべきよし、屢々下知し、それにても制し切

れぬゆへに、花園帝の延慶年中には、京都にあらゆる日蓮黨を追放すべき由の院宣をさへ下されて居る、注意すべきは此際、日蓮黨と呼ばれ、一類の僧徒と稱せられ、全く異端視せられたといふは、恐らく日蓮宗徒の行ふ所が奇矯急激に失したゆへに相違ない、それゆへに淨土宗などより屢々公家武家に其暴戾を訴へられて迫害を見たもので、熱誠は恕すべしとしても、時と場合とを論ぜず日蓮在世の眞似をすればよいと解したのが、抑々迫害を受くるに至つた原由に相違ない、乃ち念佛法華の爭論となつても、常に武家等の爲に敵視せらるゝに至つたものである。

不受不施派といふのも、全く當局者の反對に出たといふ嫌があつたものゆへ、邪宗門の中へ入れられて居る、此事蹟は今猶調査中に屬して正しい事は分らぬが、兎に角概要だけは世に知れて居つて平田

篤胤は下の如く述べて居る。

慶長十三年の宗論以來も、かの宗旨の輩、日蓮が諸宗無得道の口眞似をして他宗を詘り、其中にも不受不施派といふが情ごわの我慢をいふて噪く、元來此不受不施派といふは、日蓮が上足の弟子ぢやといふ日興といふ者、本跡勝劣といふの義を立て、駿河の富士郡に寺を建て、大石寺と號し、其弟子に日因といふ者、それを益々申し募り、本尊にも日蓮が作りたる曼陀羅と日蓮が像の外は何もおかず、法華經の中にも壽量品ばかりを取て、其餘は取らず、薄墨衣を着して、一流を立て、又日蓮が作ぢやといふて僞書を多く作つたが、其書の拙きといふばかりなく、其一を云はゞ大石寺へ鎌倉十萬貫の所領を寄附したと書いたが、今の高にしては百萬石に當るゆへ、多過ぎて、しかも分錢石直しの時代が違つて居る、それとも知らずに記

したること淺ましく、吾がいふたる嘘の直にはげるとも知らんで、かやうの言を云ひ出すとは不便なもので御座る、かくてこの不受不施派は寛文六年天下に令せられ、禁斷せられたる所が、彼輩また〳〵悲田派と名目を變へてなほ絶えざりしゆへに、貞享元祿の比まで、度々御吟味あつて、かの邪宗の輩を遠島または死罪に行はれ、其寺々を清めて大かた天台の末流となされたで御座る、江戸にも谷中の感應寺、碑文谷の法華寺、四谷の自証寺、千駄ヶ谷の寂光寺などの類ひ、まだしたゝか有る、其元祿九年の夏、上總國夷隅郡澤倉村といふ所で、幡隨院の所化が日蓮宗の僧と法論をして勝つたる所が、日蓮宗の旦那どもが腹を立て、その所化を捕へて、口を引拆いたで御座る、これがもめて公聽に達したる故双方を召して糺明せられ、日蓮宗の僧二人を穢多の手に掛け、首を切て獄門にかけさせられ、又

其擅家どもを、みな刑せられ、かの所化は御褒美に預つたで御座る、すべて古へより宗論は禁ぜられる所なる上は、彌々宗論すべからず、もし日蓮宗にて他宗を誹謗する僧あらば、訟へ出づべき由を令せられて、一ト先づ日蓮宗も口を閉ぢたが、同じく十一年又々かの悲田派の餘黨が起つて、禁令を犯したるゆへ、遠島せられたるに、また寶永四年の頃、かの不受不施の餘黨富士門徒と稱して、大に邪義を弘めた故、一黨の僧どもを、みな流罪に處せられたが、また正德五年常陸の土浦また駿河の邊に於て、五家衆旨相派と號して頻に邪法を弘めたるゆへ、これを捕へて刑せられたるに、また懲もなく、享保四年江戸に於て日蓮宗の惡僧ども、三超派といふて、かの邪法を弘める、是も同じく不受不施の流で、其本尊は俗体にして今様の上下を着せしめて、是は生田五郎兵術といふて、邪術を行つて磔の御

仕置となつた者ぢや、といふことで御座る、左に日蓮が像を置き、右に得も知れぬ異像を置いて、密に之を尊敬し、僧はやはり鼠色の衣を着て、深く庵に隱り、其徒を招いて邪義をすゝめる所が、切支丹のやうであつたといふことで御座る、そこで公より是等の輩を捕へられ、尙ほ其同類を御尋あつて、四月より六月までに數十人の邪僧を刑せられたで御座る、其後寛政の始に、又かの不受不施の輩、上總國に於て黨を集め、蓮華往生といふことをして、愚人を歸依させたことがある。(下略)

これは局外觀ではあるが、又以て日蓮宗徒迫害史の一班を知ることが出來る、兎に角に宗祖以來迫害に迫害を加へられても、いつまでも之に反抗し、當局者をして大に手古摺しめたといふは、如何に祖師日蓮勇猛の感化の深く根蔕に入り込んだものなるかをト知せられる事ではないか。

(廿七) 信仰と形式

問　日蓮宗迫害の歷史を承つて見ると、一層同宗徒の信仰心の堅確であることを知られますが、これ皆日蓮大士其人の感化力であるといつてもよいのでせう。

答　然り大に然りです、一体信仰といふことは信仰者其人が漫然信仰するのではない、被信仰者其人に信仰せらるゝだけの高崇偉大、正心誠意、至誠熱情といふものがあつて、仰くべく敬ふべく慕ふべく頼るべく、己が一身を之に傾注してよいと信ずるだけの價値が被信仰者の身邊に溢れて居るからである、イハバ其人の强力なる電氣に感じて覺えず左右へ動いて居るやうなもので、精神氣魄の力とい

ふものは、一時的の肉体は失せても決して消え去ることのない永久的のものである、例へば世に耶蘇の上天といひ弘法大師の入定といふ如きほ、恐らく此永久的なる精神的感化力の代名詞といつて然るべきもので、心靈界の活きたる力をかく呼ぶと見ても差支あるまい、日蓮其の人が本化上行菩薩の再來たる價値を有して居つたといふことが、日蓮宗徒其人の頭に感じて居つた故に、燃ゆる如き熱情となつて益々其信仰力を鞏固ならしめて居つたのです、かの元祿時代に出版になつた宗論記などを見ると、アレは淨土宗徒の手に成つたものであれども、文治聖淨論、天正邪正決、慶長虚實決と次第に述べてある文字以外に、日蓮宗僧侶及び信徒の如何に頑强なる意志を有して居つたかを認めることが出來るのである。

日銑がみけん眞實うちわられ

鼻を剔られても、額を割られても、肉体上の苦痛などは懼るゝに足らぬとの信念を養ふたものでなくば、迚も、當時の迫害には堪へ得られなかつたに相違ない。

四十餘年の耻や見えなん

所で餘談に亘るやうではあるが、宗教上の信仰といふことも商業上の信用といふことも、殆ど同樣のもので、兎角は他人をして先づ信せしめんといふのであるゆへに、唯ジッと自ら澄して居つて手を拱ねて居るのみでは他をして信仰せしむることは出來ない、即ち活動の實力といふものを若々外形に顯はして、他をして其光明に炫惑せしめ、其勢力に驚嘆せしめねばならぬ、早い話が大なる商店にて、スバラシイ裝飾をやつたり、馬鹿げたほどの廣告をするといふのも、矢張り一種の政略であつて、これは他をして炫惑驚嘆せしむる信用

擴張の手段方法である、之を馬鹿々々しいとケナすのは、ケナす方が寧ろ他人を渦仰せしむる底の能力に欠けて居るといつてもよいのであつて、此點から見ると、日蓮は實にスバラシイ馬鹿げたほどの廣告的政略をやつたものであるが、さらばとて決して之を猥りにケナすべきではない、寧ろ彼は他をして自分を渦仰せしむる底の炫惑驚嘆の手段方法を運らしたもので、實に利巧な處である、否な利巧なのみではない、實際他を魅する所の一種の能力を具へて居つたものである。

恐らく世間で他の廣告的政略をケナす商人は、寧ろ本人の意氣地ないことを自白して居るのであつて、此政略を行ふて綽々餘裕あるものこそエライに相違ない如く、日蓮が諸宗無得道の四箇格言を振り廻して、一生活動したといふのは、日蓮其人に實際エライ所があつ

た故であつて、此他人を炫惑驚嘆せしむる手段方法、語を更へて言はゞ、人を魅するの能力を發揮して餘蘊なかつたゞけが、愈々彼の偉人であつたことを立証して居るのである。

予輩は何も、日蓮大士其人に隨喜渦仰して居るのでもなければ、決して彼の行動に魅せられて居るのでもないが、近世の日蓮宗の僧侶信徒の大膽不敵なる、寧ろ他を畏れざる氣魄を有して居つたといふのは、これぞ全く日蓮其人の感化力也と認めて、それに感服して居るのである、然し現今の風潮は、信仰といふことを取違へて、信仰者其人が漫然と信ずるものである如くに思ひ、被信仰者は常に其素行も其精神も毫も顧みるに足らずと爲し、唯だ口先にてペラ〳〵利巧氣なことをシャベリ、筆先にて理窟を旨くコヂ廻し、謂はゞ智慧にて他を籠絡さへして仕舞へば、それにて信仰が自分にクッ附く如

く思ふて居るのを、予輩は大に忌々しく感じて居るのである、かゝる青年は、須らく日蓮其人に限らず、各宗の祖師高僧の行狀を熟讀翫味して、須らく其身に三省すべきであらう。

或る無學の老婆曰く、「當今のお坊サンは、妾も置くし、腥も食うし、慾も俗人より深い方が多くて、根つから有難くありません、若しお經の功力にて極樂往生が出來るものなら、慾も少く、女の事など頓と知らぬ孫に、お經を稽古させて、之を聽聞した方が、餘程有難いことゝ思ひます」云々と、老婆をして此言を爲さしめるといふのは、思ふに現時の僧侶諸君が、或は智惠の方にばかり馳せて、戒行の方を忽かせにする爲ではなからうか、兎に角此老婆親切の言は、恐らく宗教家頂門の一針であらうと思ふ、ツマリ宗教家として世人に信仰して貰いたければ、才智學問の外に、誠實熱心等の精神上の美德

は勿論、形式上に於ても平生の行狀といふものが、他をして己れを信仰せしめるだけの價値がなければならぬ、猥りに輕薄敏捷にして獨り得々たる如きは、決して他を信仰せしむる所以でないのみならず、反て他をして益々己れを疎んじ侮り、世に無用の長物視せしむる端緒ではなからうかと杞憂せらるゝ。

全体南都の小乘教時代は僧侶の戒律を喧ましくいつたゆへに、常人とは一種特異な品行性格を具へた高僧が多く、從て世人よりは誠に難有くも思はれ、其人に對する信仰といふものも至て鞏固であつた、然るに平安朝以後、大乘教の隆盛を來すに至て、僧侶は才學には長じたけれども、品行性格の見るべきものが少くなつた、それといふは、戒律を不必要視して、形式などに重きを置かなくなつたからである、それが爲に世人の信仰も漸次に薄らぎ、僧俗の區別さへつか

なくなつた、これを抑々末法といふのであらうと世人は言ふに違いない。

兎に角日蓮大士の行動の如きは、薄志弱行の徒の須らく學ふべき所である、輕佻浮薄の徒の須らく箴とすべき所である、正心誠意なきものゝ須らく倣ふべき所である、特に才學をのみ自負して德望を收むることを自覺しない徒の大に鑑とすべき所である、これは特り宗教界の人のみならず、政治界、文學界、軍人社會其他すべての方面の人々の、須らく範を取るべき偉大なる行動と認めらるゝのである。

赤裸にしたる日蓮大士　終

赤裸にしたる日蓮大士奥付

明治三十九年三月三十日印刷
明治三十九年四月五日發行

不許複製

定價金廿五錢

郵税四錢

著者　足立栗園

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉

横濱市山下町八十一番地
印刷所　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店
（電話新橋一五八七番）

足立栗園著

近世神佛習合辨

定價三十錢　郵税四錢

加藤直士著

◉宗教界の三偉人

定價金十五錢
郵税金二錢

是れ、愛と貧との福音を唱へて、十三世紀の宗教界に大改革を與へたる聖僧フランシスと、基督の勳爵士を以て自ら任じたる、宗教改革の先驅者サボナローラと、高貴にして慕はしき説教家、眞個の傳道者フレデリックロバルトソン三偉人の傳記なり、著者日本の今日に、此等の偉人を要する切なるものあるを思ひ、此著をなす、敢て大方の一讀を乞ふ。

松村介石先生著

◉五版 **萬國興亡史**
定價金壹圓五拾錢 郵稅無料

◉訂正三版 **歐洲近世史**
定價金貳圓五拾錢 小包料拾五錢

◉再版 **萬國最近史** 上卷
定價金壹圓參拾錢 小包料拾五錢

◉新刊 **萬國最近史** 中卷
定價金壹圓五拾錢 小包料拾五錢

◉近刊 **萬國最近史** 下卷
定價金壹圓七拾錢 小包料拾五錢

松村先生二十年來の企畫成就せり。古今萬國史の大巻完成せり。
右にて明治より昨明治三十七年に至る迄の人類歴史を書き終りたるなり。
其體裁は歴史の記事と共に文明進歩の迹を示し。萬國興廢の理を明かにし、
之を今日に斷じて、我大日本帝國の國是を論じたるもの也。
先生の文章已に世に定評あり。記事明晰、文字活躍す。

大西博士全集

◉第一巻 **論理學**
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

◉第二巻 **倫理學**
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

◉第三巻 **西洋哲學史** 上巻
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

◉第四巻 **西洋哲學史** 下巻
定價金二圓 小包料金十五錢

◉第五巻 **良心起原論及論集**
定價金一圓七十五錢 小包料金十五錢

◉第六巻 **思潮評論**
定價金一圓七十五錢 小包料金十五錢

◉第七巻 **論文及歌集**
定價金二圓 小包料金十五錢

本集は博士大西祝先生の遺稿の散佚するを恐れ、之を一纏めにして、先生の面影を永く後世に傳へむが爲に編纂したるもの「大西博士全集」と題したるは略々先生の遺稿の主要なるものを網羅したればなり

97
342

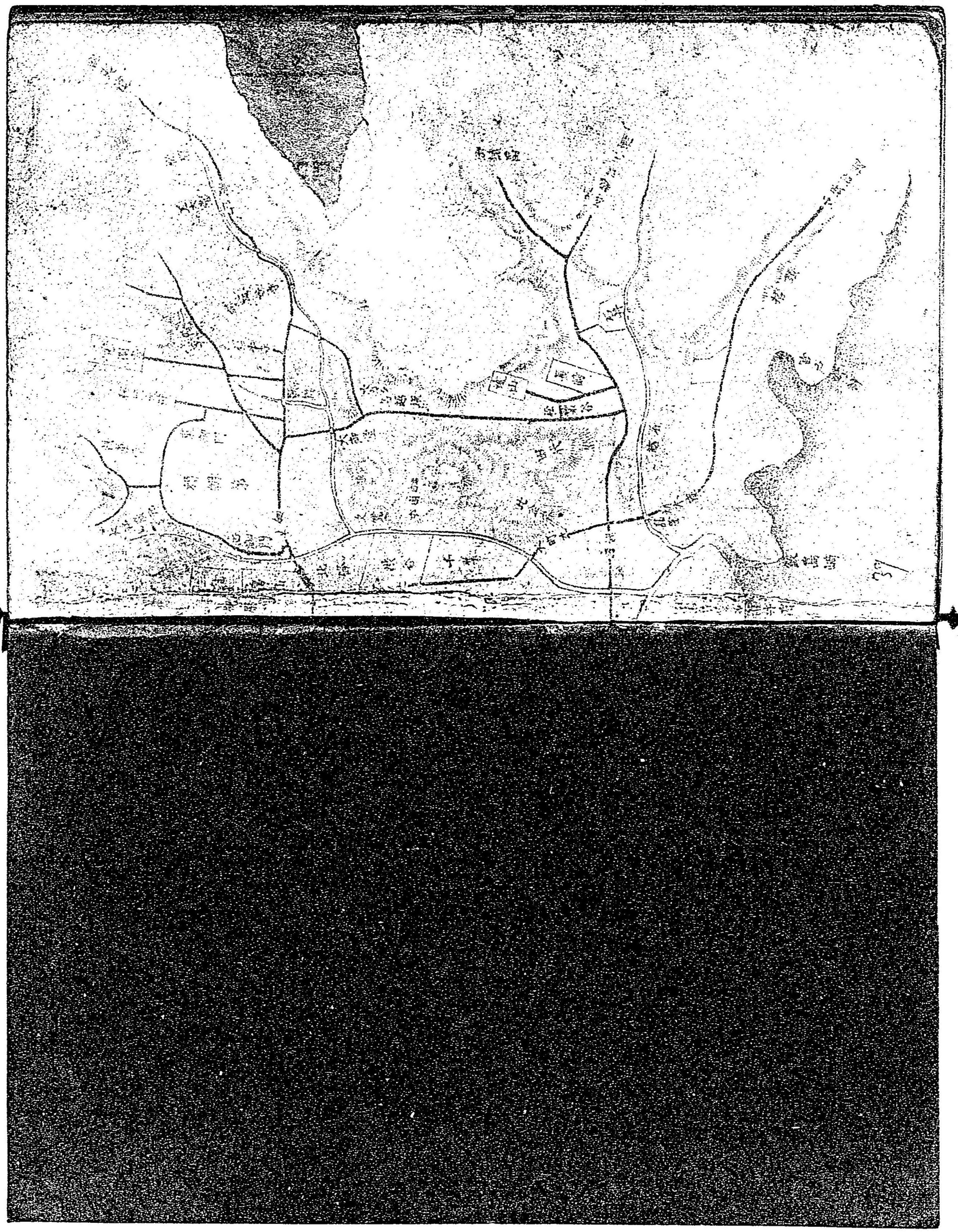
海老名彈正序
松村介石序

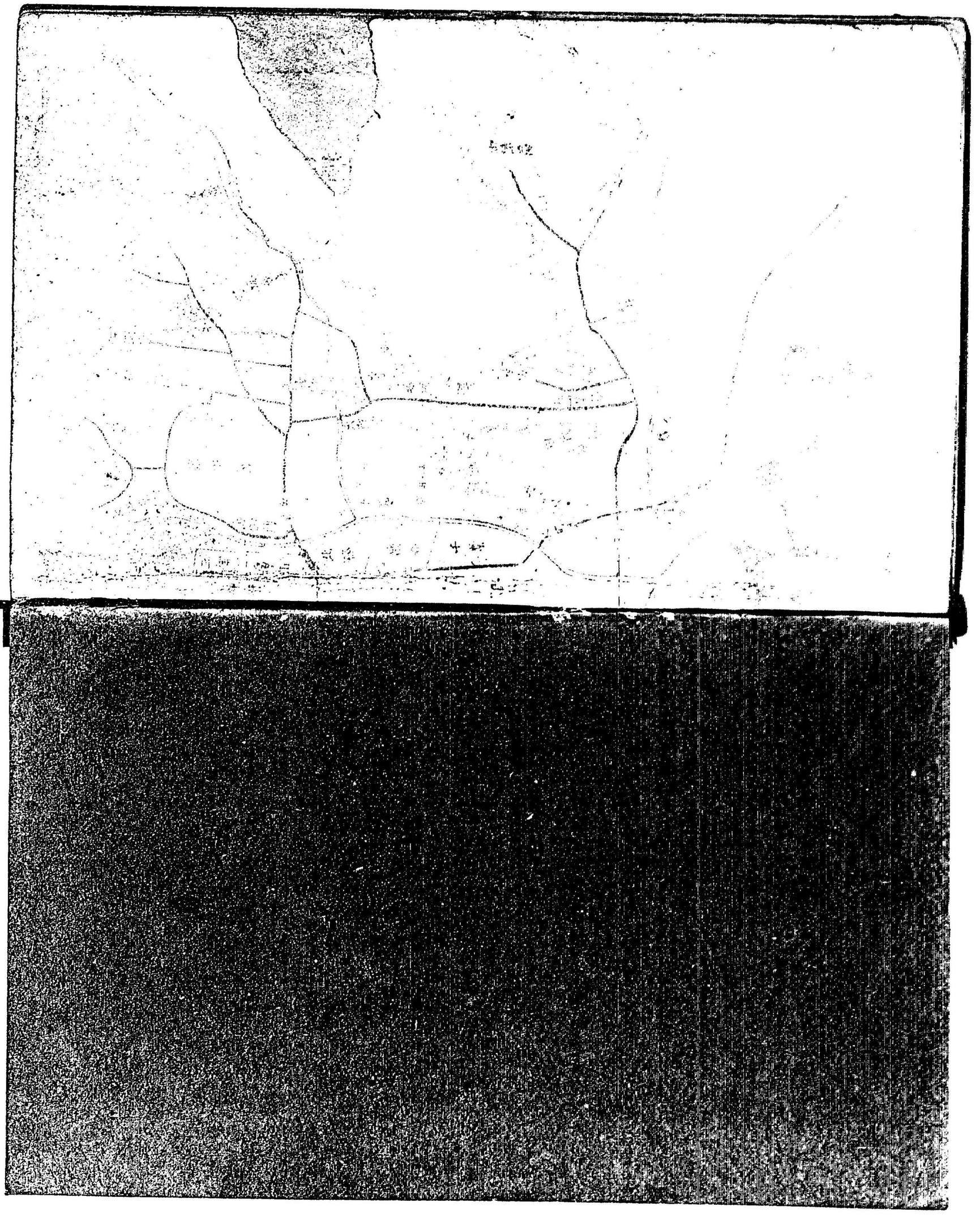
永島忠重編

◉蕃山拾葉

定價金三十五錢
郵税金四錢

英雄儒**熊澤蕃山子**、遺すところの訓戒說論百六拾餘篇を收む、其卓越せる識見と、超凡なる人格とは、以て萬世の師表と爲すに足るべく、其時代を超絕して千歲に貫くの大精神は、以て國民の誇りとするに足るべし、若し善く此書を讀む者は、必らず得るところ大なる者あらん。





97
1842

97
342

019978−000−8

97−342

赤裸にしたる日蓮大士

足立　栗園／著

M39. 4

ABH−0132